

続・ロータリー随想

その周辺とともに

菅生浩三

1996年2月

ロータリーの「サービスの理念」で
個人と社会とを結ぼう
あるロータリアンの提言

続・ロータリー随想

その周辺とともに

菅生浩三

はしがき

早いもので、先般『ロータリー随想』を世に出してから、いつしか三年という年月が経過した。その間、国際社会は、全般的にも、はたまた地域的にも、政治、経済その他社会の各方面にわたり、未曾有の歴史的な変貌を遂げつつあるが、なかんずくわが国は、明治維新と敗戦に次ぐいわば第三次の本格的近代化ともいうべきかつてない構造的な変容の渦中にあり、変革の波は、単なる社会の外況だけでなく、社会意識や価値観などの内的状況にいたるまで、着実に深く浸透しつつある現況にある。ロータリーとロータリーを取り巻く環境も、例外ではない。従って、前書上梓の後の三年間に書き留めた雑文の中には、このような激甚な変化の過程にあつて、すでにその意味の大半を失ってしまったものや、いささか見当違いの内容のものも散見し、公表を躊躇したいものも多い。ただ、前書自体が

本来不覺にして未熟な私の試行錯誤の一里塚であつたものであるから、若干の駄文をその延長に追加することは、許されるかも知れないし、激しい時代の変化にかかわりなくその底に潜む変化を予定されないものへのささやかな模索の試みとして、許されるものもあるかも知れない。そのように考えて、一部に若干の補正を加えることはしても、敢えて除外しないこととした。

前書に引き続きご笑読のうえ、ご意見なりご叱正を賜われれば、望外の幸せである。本書の上梓にあたり、数々の貴重なご指導やご助言を賜つた諸先輩や友人のロータリアン各位のご厚情に深謝申し上げますとともに、前書同様万般のお世話をいただいた株式会社朝日カルチャーセンターの小倉淳平氏に、心から感謝申し上げます。次第である。

一九九六年二月

菅生 浩三

目次

はしがき

毎年度の R I のテーマについて

6

シエルドンと「サービスの理念」

22

ロータリーが当面する基本的課題

37

和魂洋才と「サービスの理念」

51

ロータリー理解推進月間にあたって

76

IGF(都市連合一般討論会)について

80

クラブ奉仕(クラブ・サービス)あれこれ

87

ロータリーの雑誌

95

ボランティアとロータリー

105

ロータリーから見たロータリー・プログラム

110

世界ロータリー・週間

120

ロータリー・年次大会に想う

125

青少年への奉仕活動

129

青少年活動をめぐって

136

米山記念奨学会活動をめぐる若干の問題について

144

米山奨学生を送る

150

不況雑感

152

付 各年度のRIのテーマ

194

毎年度の R I のテーマについて

一、はじめに

いわゆる R I のテーマ(以下「テーマ」という)は、一九四九—五〇年度のパーシー・ホジソン会長が年度の目標として四項目を掲げたことを嚆矢とするといわれ、あるいは一九五三—五四年度のホアキン・セラトサ・シビルス会長の年度にテーマを公に発表するようになって以来始まったともいわれている。いずれにせよ、四〇年あるいはそれ以上の歴史を積み重ねてきていることになる。

現年度までの歴代のテーマは、末尾添付のとおりである。文献によって多少食い違いがあるが、Official Directory 中の Rotary International Themes の記載を基準とし、「ロータリーの友」、「ロータリー・ダイアリー」、「ロータリー日本五〇年史」付録の「歴代 R I 会長ターゲット集」などを参考として、その記載と相違

する部分は、これを括弧で付記した。

テーマは、以前はターゲット Target、エイム Aim、ホール Goal、プログラム Program などと呼ばれ、また、「R I会長のテーマ」と呼ばれていたが、現在「R Iのテーマ」と呼ばれることとなっていることは周知のとおりである。R I会長は、自分の任期一年間の活動目標をテーマという簡潔な言葉で表現して、全世界の地区ガバナー、クラブ会長及びロータリアンに訴えることが慣例となっている。従ってテーマは、R I会長が、自分の年度の抱負を端的に物語りかつ活動の進路を示すものとして、年度のプログラムを遂行して行くうえで最大の重要性をもつものとされている。また、テーマには、サブ・テーマが付されたり、具体的な行動計画を含む会長のメッセージやコメントとともに発表されることが多く、テーマは、これらを十分に検討し了知したうえで、これらとともに総合的に理解すべきものであろう。

ところで、私は、(1) テーマは、ロータリーの世界で役に立っているか。テーマには、どのようなプラス面があるのか (2) テーマには、どのようなマイナス面

があるか、との二つの観点から、R I第二六六〇地区のR I元理事、バスト・ガバナー、ガバナー、ガバナー・ノミニー、クラブ会長、ロータリー情報委員長はじめ、多くのロータリアンの方々の意見をきいてみた。以下その結果を簡単に紹介する。

二、テーマの効用の積極的側面

まず、テーマが役に立っているか、どのようなプラス面があるかの点についてである。肯定的なご意見が多数を占め、その大略は次のようなものであった。

ガバナーが活動目標として引用することができ、有用である。ロータリアンやクラブ間の連帯感や意識の統一感を醸成している。活動のマンネリ化を打破し、活動にアクセントを与え、新しい行動を喚起し、クラブの活性化をもたらしている。クラブ会長の方針やクラブの年度計画のバックボーンとなり、委員会活動の指標となっている。ロータリー精神の色々な切り口を提示し、様々な側面を認識させ、気付かなかったことを気付かせ、忘れていたことを思い出させ、眠ってい

た意識を目覚めさせ、ロータリーの原点への思考をうながし、ロータリーの深さを学ばせ、ロータリーを考える機会を与えている。新鮮な刺激を与え、ロータリー精神の再認識と活動への意欲を喚起し、高めている。原点をふまえたロータリー活動への色々なスタンスのあり方を例示している。ロータリー活動の動機付けについて、新鮮で個性的な視点を提供している。活動実践の充足感とテーマへの理解の相乗効果が、ロータリーの理解を深めている。幅広いサービス活動を検討するうえで有用である。時代の課題を時事的に念頭において弾力的なサービス活動を遂行して行くうえで、適切なスタンスを与えてくれる。R I会長の国際感覚、時代感覚、価値観、考え方、人柄などに触れる数少ない機会として有用である。年度ごとに区切りをつけて再出発するにあたり、新鮮なインパクトを与え、精神のリフレッシュ効果をあげている。綱領に次いで、個人としての日常生活の指針として役立つ。心に残るテーマは個人としての生き方の指標となっているし、過去のテーマは自己の過去をふり返り反省するよすがとなっている。テーマは、クラブ例会や日常の会話の話題として有用であるし、人間として

の成長の契機となつてゐる。日常生活や仕事の面で行動方針を決定するにあたり、表裏の両面にわたり、多様な影響を与へてゐる。

以上のような意見であつた。また、テーマは、R Iの根本方針をクラブに伝達し、クラブの自主的な活動をうながすものであるから、反面において、R I自体による具体的なプロジェクト企画の多発を抑止する効用があるのではないかとの、有力な意見もあつた。

三、テーマの効用の消極的側面

次に、テーマにマイナス面があるかどうかの点についてである。このような否定的な意見はむしろ少数であつたが、大略は次のとおりであつた。

実効性のある伝達は地区ガバナーやクラブ会長どまりで、一般会員にまで十分に浸透してゐるとはいえず、具体的な効果に結び付いてゐない。ロータリーの原点は各ロータリー・クラブにあるといいながら、クラブ会長が独自の方針を打ち出すにあたり、妨げとなつたり、調整に苦勞をさせる原因となつてゐるだけでない

く、クラブ独自の活動の拘束となりかねない危険がある。抽象的なテーマや簡潔なテーマは、意味が分らず解釈が分れて混乱を招くだけでなく、表面的な勝手解釈に終って、正確な理解がえられない場合がある。難解でなじみにくい表現のテーマは、誤解を招き易い。背景となつてゐる国民性、社会意識、宗教観などの相違で、理解が困難なものがある。サブ・テーマなどで、テーマ自体についてのより直接的な補足説明を分かり易い表現で十分に付加しなければ、効果が期待できない。テーマの理解には、非常な個人差がある。R I からの一方的な伝達であるため自発性を欠き、受ける側のニーズと受け止め方によつて、効果は様々である。R I 会長のノミニ時代やエレクト時代の実務面での準備が必ずしも十分でないとか、発表の時期が遅いためにガバナー・ノミニとのコミュニケーションが不足するなどの原因で、十分な効果が上つていない。また、クラブ・レベルにおける活用と反映の障害ともなつてゐる。新鮮なのは年度最初の一時期だけで、年度の後半には効果が薄れ、年度が過ぎると忘れ去られてゐる。毎年度テーマが変るために、焦点がぼけて効果が減殺されてゐる。翻訳の基礎となつてゐる表現の言

語感覺や文化觀念の相違が十分に消化されていないために、なじみにくいだけでなく、理解が困難である場合が多い。人生觀や世界觀を含むものは、思い切つて大胆な意識を試みることも必要ではないか。テーマ自体にも、実はマンネリ化があるのではないか。あまりにも個性的な主張よりは、むしろ個性を超えた客觀的な要素が要求されるのではないか。

などが主な意見であつた。また逆に、簡潔なものは永く心に残るが、具體的な事項の単なる羅列などは心に残らないとか、英文（原文）と日本語訳が並記されているので、その対比によつて却つて理解が深まるなどの意見もあつた。

四、テーマの効用の要約

一言で要約するならば、テーマは、國際協議会などを通じて R I 会長から地区ガバナーに、地区協議会などを通じて地区ガバナーからクラブ会長に、クラブ協議会や会長の時間などを通じてクラブ会長からクラブ役員、委員長、クラブ会員にそれぞれ伝達されることが予定されており、新しい年度の開始にあたり、地

区、クラブ、会員にそれぞれ清新な指標としてのインパクトを与えているが、具体的な成果としてどこまで結実しているかは、テーマの内容により、また、地区、クラブ、会員の受け止め方によって、ケース・バイ・ケース区々であつて、一律に評価することはできないということであろう。

五、テーマと綱領との関連

人は、生まれながらに社会的な存在であり、いわば社会性をその重要なむしろ決定的な原質として生きるものである。従つて、人は、自己に与えられた職業を始め一般の社会的行為を誠実に遂行し、良質の成果を他人のために社会のために提供することを基本の倫理として生きるものであり、その充足によって初めて幸せに生きることができるのである。このことは人間社会普遍の真理であり、ロータリーだけに固有の考え方ではない。ただ、ロータリーは、私どもがこのような社会的責務を自覚して実践することを「The Ideal of Service」[サービスの理念]（一般には「奉仕の理想」と邦訳）にとらえ、「綱領」の形式で組織の唯一最高

の規範として掲げているわけであつて、ここにロータリーのかけがえのない存在意義があるかと思うのである。「他人への愛」といい、「他人との友情」といい、「人間の善意」といい、「相手への思いやり」といい、これらのすべては、ロータリーの世界にあつては、The Ideal of Service の実質を色々な側面から取り上げて、その切り口を具体的に表現したに過ぎないのではないかと思う次第である。

ハ) The Ideal of Service は、人の基本的な精神的資質として、すべての人が本来持ち合わせているものであるが、知能や感覚の個人的資質の展開にまぎれ、また、本能的な欲望追求の陰にかくれ、開発されないうままに眠っている場合が多く、このことが個人や社会の数多くの不幸な事態を招いているといえよう。そこでロータリーは、人々の中に眠っているハ)の The Ideal of Service を呼び起し、目覚めさせ、人々にその社会的責務を實行させて行こうとするのであろう。ところが、ロータリーの「綱領」自体には、Service 「サービス」とはそもそも何であるかについて、何ら定義もしていないし、また、解説もしていない。そこで、ま

す、The Ideal of Serviceの何たるかを説示して理解させ、それが私どもが幸せに生きて行くために不可欠の精神的資質である所以に十二分の認識を深めさせることが必要となつてこよう。そして次に、その実行を必要とする現状や、実行によつて得られる成果や、さらには実行の具体的方法などを指摘し、或いは提示することによつて、私どもが実行に踏み込むためのインパクトを与えることが必要となろう。ロータリーの第一の標語Service Above Self「超我の奉仕」は、「超我」の訳のニュアンスの当否はさておき、Service「サービス」とは私どもの自己の個人的利害を超えた社会的責務の認識と実践であることを指摘してこれを強調する意味において、The Ideal of Service 自体の内容を説示しこれに肉付けを与えたもので、その的確なより具体的表現といふべきであるから、第一次の標語としての位置付けを与えられるべき所以も、正にその点にあると思われる。また、He Profits Most Who Serves Best「最もよくサービスをする者は、最も多く報いられる」との標語も、「サービスの理念を正しく理解してその実行を重ねる者が、真の幸せを多く手に入れることができる」ということを指摘する意味において、

The Ideal of Service のあり方を具体的な側面からの確に表現するものである所以が理解される。「決議二二—三—三四」「四つのテスト」「職業宣言」なども、The Ideal of Service を自覚させ、その実践をうながす意味において、同様の趣旨と効用を帯有するものであろう。

テーマも、以上のような動機から、以上のような目的を以て、ロータリーの世界に発表され伝達されるものであり、本来的にはこれらの標語や決議などと同質の性格のものといえようが、年度の運営管理の委託を受けた最高の責任者が、自己の個人的な視点から、年度ごとに The Ideal of Service の切り口を提示して、その認識と実践をうながして行こうとする点に、その意義があるものと思われる。従つて、多くの場合、ロータリーの精神的側面と行動的側面のいずれか一方またはその双方の強調を内容とするものとなつてゐることは、当然の事理であるし、このような目的と効果にどの程度適合しているかどうか、テーマとしての効用の評価にかかわることとなると思われる。また、このような見地から歴代のテーマを現在の時点であらためて眺めなおしてみると、新しい意義を再発見する

ことができるのではないかとも思うのである。

このような見地から眺めると、ラング(五六―五七)、ラハリー(六二―六三)、
 ブライトホルツ(七一―七二)、ロピンス(七四―七五)、メロ(七五―七六)、
 マンチェスターII(七六―七七)、カドマン(八五―八六)、カパラス(八六―八
 七)、アーチャー(八九―九〇)、コスタ(九〇―九一)、サブー(九一―九二)
 の各会長年度のテーマは、The Ideal of Serviceの内容の説示や取り上げ方など
 が、会長の民族性、社会意識、宗教観などによって個性的な違いはあるが、どち
 らかといえばロータリーへの理解という精神面の意義を強調する点に比重がある
 と思われるし、ホジソン(四九―五〇)、レグー(五〇―五一)、シビルス(五三
 ―五四)、テイラー(五四―五五)、ベーカー(五五―五六)、テンネント(五七
 ―五八)、ランドル(五八―五九)、ミラー(六三―六四)、ティーンストラ(六
 五―六六)、エバンス(六六―六七)、ホッジス(六七―六八)、東ヶ崎(六八―
 六九)、カーター(七三―七四)、デービス(七七―七八)、レヌフ(七八―七九)、
 ボーマーJr.(七九―八〇)、クラリッヒ(八〇―八一)、マツキヤフリー(八一―

八二)、向笠(八二―八三)、カンセコ(八四―八五)の各会長年度のテーマは、取り上げた分野や視点が、一般論か各論か、特定の分野か活動全般か、ロータリーの社会的影響力の強化を特に強く意図しているかどうかなどの諸点でニュアンスの差はあるけれども、おおむねサービス活動の実践面を強調する点に比重がおかれているように思われる。また、トーマス(五九―六〇)、マックロウリン(六〇―六一)、エービー(六一―六二)、ペッテンギル(六四―六五)、コンウェイ(六九―七〇)、ウォークJr.(七〇―七一)、ヒックマン(七二―七三)、スケルトン(八三―八四)、ケラー(八七―八八)、アビー(八八―八九)、ダグターマン(九二―九三)、バース(九三―九四)の各会長年度のテーマは、精神面と行動面の双方にわたって意義を強調しているように受け止めることができるのではないかと思う次第である。

六、ロータリー活動に占めるテーマの意義

法律の世界に、「独立燃焼」という考え方があつた。物に火をつけて放火しても、

そのままでは案外燃え上るものではないが、放火犯が材質や媒体や燃焼方法などを色々と工夫して努力を継続すると、やがてほっておいても目的物が自分で勝手に燃え続ける状態になる、そこで初めて放火が既遂となるという、刑法の考え方である。大変ぶしつけな表現で申し訳ないが、ロータリーは、いつて見れば、人々の胸に眠っている The Ideal of Service「サービスの理念」の資質に火を放ち、独立燃焼の既遂の域に持って行くこうとしている、いわば人間社会に向けての素晴らしい放火犯の組織のようなものかと思う次第である。R I会長は、さしずめ、いわばその組織の主犯とか首魁とかいふべき立場の人で、テーマは「活動の遂行にあたっての声明」とでも申すべきものであろうか。

ところで、八九年以来、私どもの世界は大きな衝撃を受け、全貌がつかめない根本的な変革の時代に入っているが、ロータリーは、このような変革の時代にとどのように対応して行ったらよいのであろうか。一言でいうならば、従来のロータリーは、資本主義的な社会の運営にいわば伴走する付添人の立場で、The Ideal of Service という理念を提示し強調するということによって、資本主義的な社会に発生

する色々な弊害を軽減し除去する努力を続けてきた。ところが、八九年以来は、資本主義も共産主義もない、また、自由主義も社会主義もない新たな人間社会の世界が突如として現出し、只今のところ私どもは、「人間」自体を裸のままで観察し、理解し、把握して、社会の運営管理のあり方を原点から考え直しやり直してみなければならぬ時代に入ってきたといえよう。

ところで、人間は、「知能」に始まり、「知能」に終る存在である。私どもは、この与えられた「知能」という特異な資質によつて、若干の快適さや豊かさを手に入れることができたが、その見返りとして、社会とか自然といった生存環境の全般にわたる大変な障害や被害の中に生きることを余儀なくされている。知能によつてもたらされた災厄の解決は、知能の中にしか存しないことは、自明の理である。しかも、その知能の恣意的な開発と利用への制約は、すでに歴史的失敗に終わった社会の完全管理の思想のように外から加えられるものは無意味であり、自発的な内部からのいわば自己制約でなければ、意味はない。そして、その場合における私どもの拠りどころは、ロータリーがすでに創立以来始終一貫提示してき

た The Ideal of Service である。何故なら、The Ideal of Service は、人間の本質である社会性の真の認識と実践を目ざすものであり、これ以外に知能に対する適切で合理的な自己制約は存しないからである。

かくて、ロータリーは、今や単なる「伴走者」や「付添人」ではなく「当事者本人」の立場に立って、その掲げる人間社会普遍の真理 The Ideal of Service をこの私どもの社会に提示し、その成果の実現に最善の努力を傾注して行くべきである。私どもは、今後のR I会長がこのような視点からの確にして感動的なテーマを提示され、私どもロータリアンを激励して下さることを心から祈念してやまないものである。

(一九九三年二月)

シエルドンと「サービスの理念」

一、はじめに

「サービスの理念」The Ideal of Service は、シエルドンによつてはじめてロータリーに取り入れられた観念であり、シエルドンがロータリーの歴史における最も重要な源流であることは、周知のとおりである。

いうまでもなく、ロータリーの存在意義とその核心は、国際ロータリーの定款第四条及び標準ロータリー・クラブ定款第三条に定められている「ロータリーの綱領」Object of Rotaryにある。そして「綱領」の考え方の中核は、「サービスの理念」The Ideal of Serviceである。私もロータリアンは、ロータリー・クラブに入会することによつて、この綱領を受諾したのである。そして、私もロータリアンの一人一人（綱領中の Each Rotarian, Every Rotarian）は、**実業 Business**

に携わる者であれ、専門職務 Professions に携わる者であれ、また、クラブ奉仕 Club Service であれ、職業奉仕 Vocational Service であれ、社会奉仕 Community Service であれ、国際奉仕 International Service であれ、いずれの分野であるを問わず、私どもが社会において遂行して行く有益な事業 Worthy Enterprise の基礎として、この「サービスの理念」The Ideal of Service をしっかりと認識して実現してゆくことが求められているのである。

二、綱領の変遷とサーガズ Service の思想の導入

ところで、周知のように、「ロータリーの綱領」Object of Rotary が現在のよう
な内容と表現のものとなったのは、一九三五年メキシコ・シティの国際大会であ
った（もつとも、当時の「綱領」自体は、Objects と複数形となっており、これが
現行の Object と単数形になったのは、一九五二年アトランティック・シティの
国際大会である。また、四項の Men が Persons となったのは、一九八九年シンガ
ポールの規定審議会である。これらの変更が大変重要な意味をもっていること

は、いつまでもない)。一九〇五年二月に青年弁護士ポール・ハリス Paul Percy Harris、鉦山技師ガス・ローア Gus Loehr、石炭商シルベスター・シール Silvester Schiele、仕立屋のハイラム・シェーレイ Hiram Shorey の四人によつて最初のロータリー・クラブがシカゴに創設されたときの綱領（一九〇六年一月付印刷）では、会員の事業利益の増大と、親睦その他社交クラブとしての必要事項の推進が謳われただけで、会員相互の互恵取引を目的とする友好クラブに過ぎなかった。サービス Service という考え方など、ポール・ハリスをはじめ誰も考えておらず、一業一人制の実業人と専門職業人の集ったクラブで、食事を共にし、楽しいことをして、友情を深めるための集いに過ぎなかつたのである。クラブの名称も、「ロータリー」となる前に、Food-Fun-Fellowship を略した F F F クラブという試案が検討されたくらいであつた。その後、地域社会への公共的関心の喚起やいわゆるロータリー・クラブの拡大などが唱えられ、カリフォルニア州サンフランシスコなど、一九一〇年には全米のクラブ数が合計十六を数えるにいたつて、「全米ロータリー・クラブ連合会」が結成されたが、さらに同年カナダのウイニペグ

に、翌一九一一年アイルランドのダブリンや英国のロンドン、ベルファストなどにもクラブが結成されるにいたり、「ロータリー・クラブ国際連合会」と改称され、一九一一年にはオレゴン州ポートランドで、一九一二年にはミネソタ州デユルースで、相次いで国際大会が開催されるようになった。この一九一二年のデユルースの国際大会では、模範ロータリー・クラブ定款及び細則が承認されたが、その「綱領」は次のようなものであった。

「第一、すべての合法的職業は尊重されるべきであるという認識を助長し、かつ各会員の職業を社会への『奉仕』の機会を提供するものとして品位あらしめること。第二、実業及び専門的職業の道徳的水準を高めるよう鼓吹すること。第三、構想や事業運営方法の交換により、各会員の能率を増進すること。第四、『奉仕』の一つの機会として、また成功を助長するものとして、情理のある交友関係を推進すること。第五、公共の福祉に対する会員各自の関心を刺激し、かつ市の発展のため他の人々と協力すること」

この綱領の中の「奉仕」の文字は、ロータリーの綱領に「サービス」Service

という考え方が登場した最初である。そして、その模範ロータリー・クラブ定款中の綱領の規定は、一九一八年カンサス・シティの国際大会において、ロータリー・クラブ国際連合会自体の綱領の第三の中に、次のように取り入れられた。

「国際連合会自体の活動を通じ、また加盟ロータリー・クラブを通じて、次の事項を鼓吹し育成すること(イ)実業及び専門職業の道德的水準を高めること(ロ)すべての尊ぶべき事業の基礎としての『奉仕の理想』(ハ)地元の地域社会の市民、商業、社会の繁栄、及び道德の高揚に対する全ロータリアンの積極的関心(ニ)成功を助長するものとして、かつまた、『奉仕』の一つの機会として、広範な交友関係の増進(ホ)ロータリアンの能率と有用性を高める手段として、構想及び事業運営法の相互交換(ヘ)すべての合法的職業は尊重すべきであるという認識を深めること、そして各ロータリアンの職業を、社会への『奉仕』の機会を提供するものとして品位あらしめること」

これが、現行の綱領のいわば祖型といふべきものである。

このように、綱領の変遷について詳細に述べられているのは「サービス」Service

について全く触れていなかった一九〇五年の最初の綱領と、初めて「サービス」Serviceを取り入れた一九一二年デュルースの国際大会で承認された模範ロータリー・クラブ定款の綱領との間に、わがシェルドンの「サービス」Serviceに関する提言があるからである。

三、アーサー・フレデリック・シェルドンとその「サービス」Serviceの思想

アーサー・フレデリック・シェルドン Arthur Frederick Sheldon は、ミシガン州の出身で、シカゴ大学を卒業後、出版会社のセールスマンとなった。しかしながら、周知のように、当時のシカゴは、実業に携わる者は、利益を追求するにその手段を選ばず、仮借ない搾取や詐欺などの犯罪的手法が横行し、商道徳は地に堕ちた暗黒時代であった。一九〇八年にシカゴ・ロータリー・クラブに入会したシェルドンは、発想力が旺盛で何事も徹底しないと満足しない人物で、当時の時代の背景の中で、一体ロータリー・クラブの存在意義は奈辺にあるのかという根本的な疑問を持つにいたった。そして、商いの世界の頹廃した中であっても、例外

的に公明正大な経営方針を堅持する商人が結局において成功しているという事実を発見し、その理由を探究した結果、「他人の立場を考え、他人のためになるように尽くすこと」すなわち「サービス」Service の精神に従って行動する者こそが成功するのだとの結論に達し、この「サービス」Service の考え方がロータリーの存在理由であると断ずるにいたった。そして、彼は、ミネアポリスの理髪店で散髪しているときに、この結論を言い表すために「仲間にも良く奉仕する者は、最も多く利得する」He Profits Most Who Serves His Fellows Best という表現を思いついたのである。一九一〇年八月にはじめての全米ロータリー連合大会がシカゴで開催され、その晩餐会の席上で、彼は実業人には道義心が必要であるとの趣旨の演説を行ったが、その中ではじめてこの表現を発表したのである。そこで、同連合会の初代会長であったポール・ハリスは、ロータリーの新しい理想を求めてその存在意義を明確にする必要を痛感し、Business Methods Committee という委員会を設け、その委員長に入会二年の新参会員であったシエルドンを任命したのであった。そこで、シエルドンは感激してさらにこの問題に取り組み、

翌一九一一年ポートランドの全米ロータリー連合大会に提出すべく彼が発想した新しいロータリーの理想について詳細な準備をしたが、余儀ない事情で出席できないこととなったために演説原稿を作成して大会に送り、席上この原稿が代読された。その内容は大約次のようなものであった。

「商売には科学があり、それはサービス Service の科学である。そのサービス Service の科学とは、『最善のサービスを行う者には、最大の利得がある』He Profits Most Who Serves Best である。人生における成功は、広い意味では、幸運とか、チャンスとかによるものではなく、自然の法則に支配されるものである。精神的、道徳的、物質的、靈的な法則に左右されるものである。すべてこれらの自然法則と調和して働けば、最高の成功を勝ち得られる筈である。人がもし宇宙の大法則を知れば、自ずから万有存在の意味がとけてくる。それは、人類連帯性の自覚であり、万有一如の認識であり、人間皆同胞の理解である。この高い水準に立ってながめるとき、人々は次の事実が誤りのない現実であることを諒解するにいたるであろう。すなわち、商売の上であろうと、一般処世の上であろうと、

『最善のサービスを行う者には、最大の利得があるのである』 He Profits Most Who Serves Best』。ハイデ彼は、前年の表現から「仲間」 His Fellows の限定句を削り、問題を完全に一般化した表現に進めて提言したのであった。この提言は、一瞬の静寂ののち、大会出席者全員の万雷の喝采によって大会決議として承認された。そして、このシエルドンの思想が、模範ロータリー・クラブ定款中の綱領にはじめて盛り込まれるにいたったことは、前述のとおりである。

四、フランク・コリンズとそのサービス Service の思想

ところがこの大会では、さらにもう一つの重要な提言がされた。新設のミネアポリス・ロータリー・クラブの会長で弁護士のフランク・コリンズ B. Frank Collins が、その演説の中で、ロータリーの原則として「無私の奉仕」 Service, Not Self を提言したのである。この「サービス」 Service がシエルドンの「サービス」 Service を受けたもので、これと同義であることはいうまでもない。コリンズは、問題をより簡単に徹底した表現を用いて呈示したわけである。ただ、自

否定が強過ぎて適当でないとして、翌一九一二年デュルースの国際大会で、「超
 私の奉仕」Service Above Selfと修正され、シェルドンもこれに賛成したよう
 である。そして、この二つの提言は、それぞれロータリーの標語 Mottoとして永
 久に膾炙し、また Service Above Self-He Profits Most Who Serves Bestという形
 でも使用され、一九五〇年デトロイトの国際大会で公式の標語として採用され
 た。ただ、一九八九年のシンガポールの規定審議会で、Service Above Selfが第
 一標語に、He Profits Most Who Serves Bestが第二標語に指定されて今日に至っ
 ている。

五、サービスの理念 The Ideal of Service がロータリーの世界と人間の社会に

占める意義

シェルドンの He Profits Most Who Serves Best には、Profits 「利得」の表現が
 物質的現実的で適切でないとの論議があることは周知のとおりである。また逆
 に、コリンズの Service, Not Self は「自己」否定が極端過ぎて適切でないとの批判があ

つて修正を余儀なくされたことも、右に述べたとおりである。ここで、シエルド
ンが実業人であり、コリンズが専門職業人であったことは、興味深い。シエルド
ンの提言が余りにも現実的に過ぎるとの非難は主として専門職業人の側から加え
られ、コリンズの提言が現実的でないと非難は主として実業人の側から加えら
れたものようである。実業は営利を絶対の目的とし競争を必須の手法としてそ
の克服が至難であることを、セールスマンとして実業人であったシエルドンはよ
く自覚していただけに、サービス Service の価値を実業人に分り易く理解させるた
めに Profits と表現したのである。一方、専門職業人は自己の心掛けによって
比較的容易に職業行為を醇化しうる立場にあるから、弁護士として専門職業人で
あったコリンズは、Service, Not Sell といふ純粋な表現に容易に徹することがで
きたのであろう。シエルドンが決して物質的な現実的な報酬を念頭において「サ
ービス」Service を説いたものでなかったことは、一九一一年ポートランド連合
大会に提出した彼の演説原稿中の前述の説明を見ると容易に理解できる。彼は、
原稿の中で、私どもが人間の連帯性を自覚し、万物が一如であることを認識し、

人間が皆同胞であることを理解すれば、「サービス」Serviceの精神こそが私どもに成功と幸せをもたらすものであることが理解できるであろうと述べているのである。従って、シェルドンの Profits は、ポール・ハリスがその著 This Rotarian Age『ロータリーの理念と友愛』（昭和十一年、米山梅吉訳）の中で指摘しているように、「精神的な報酬」に主眼を置くものであろう。

人間は、自己の責任を以て一人で生きて行かなければならないが、同時に、人は一人では全く生きて行けない存在である。人間は、物質的には衣食住をはじめ色々の需要を満たし、精神的にも他と補完し合って、はじめて生を全うすることが出来るものである。従って、人間は、社会において他人様の職業上の成果や一般社会活動上の成果の提供を享けてこれを利用していただくことによつて、はじめて豊かな生活と幸せを享受することができるわけであるから、反面、自身も、自分に与えられた職業活動はもちろん、一般の社会的な活動行為においても、少しでも良質の成果を達成してこれを他人のために社会のために提供して行く社会的な責務を負っているといわねばならない。人は、生まれながらに社会的

な存在であり、いわば社会性を決定的な原質として生きるものである。換言すれば、個人の独立性の自覚を前提としつつ、人間の社会性を自己の原質として厳しく認識し、これに基づく社会的責務の最善の実現に努めることを基本の倫理として生きるものである。このように、社会的責務を自覚して実践することが「サービス」Service である。これは、本来は人間社会の根底を流れる普遍的な真理であろうが、なかならず欧米の社会にあつては、顕著なむしろ日常の社会意識であつたものであらう。シエルドンは、ロータリーの創設期においてすでにその存在と意義に気付き、これを明確に指摘してロータリーの世界に持ち込んでその基礎にしっかりと据え付けたわけである。

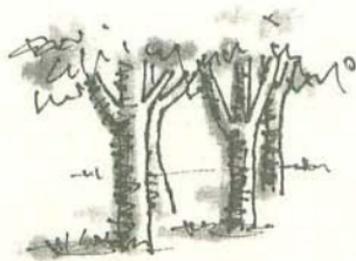
一九一〇年シカゴの第一回ロータリー大会の計画を樹てて以来、三〇年の永きにわたり第一代事務総長を努めたチェスレー・ペリー Chesley Perry の組織的貢献は多大なものがあるが、ロータリーは、ポール・ハリスの発想と設計のもと、ペリーの組織したハードの中に、シエルドンが提唱した「サービス」Service の精神をソフトとして盛り込んで構築された、人間至高の社会的作品といふべきでも

のであろう。ただ、惜しむらくは、個人の独立よりはむしろ周囲への適応を優先させる意識を主流とするわが国の社会にあつては、「サービス」Serviceの観念は甚だ稀薄で、むしろ無いに等しい状態であつたために、一九二〇年（大正九年）米山梅吉氏によつてロータリーがはじめてわが国に導入されるにあたり、関係者は、Service「サービス」の語の邦訳に適当な言葉が存在しないため、やむなく「奉仕」の語をあてざるをえなかつたのであろうが、このことが、今日にいたるまで、Service「サービス」の観念にかかるわが国ロータリアンの理解の不徹底ないしは誤解を招来しているとするならば、ロータリーの存在意義自体の根本認識にかかる基本的な事柄であるだけに、早急に何らかの有効な是正措置が必要であるのかもしれない。

東西の冷戦構造が解消し、人間社会の状況があらのまま私どもの前に露呈されることとなつた現在、個人の絶対性を前提とする欧米主導の人間活動は、果てしない恐るべき人間の技能の資質の開発とともに、物質と精神の両面にわたり致命的な障害を私どもに齎しつつあるし、漸く私どもは、このような従前の欧米主

導型の文化や社会のあり方について、近代史始まって以来はじめての根本的な省察を加えなければならぬことに気付きはじめていたのである。ただ、人間存在の原質としての社会性を正しく認識してこれを的確に実践してゆくことによつてのみ人間生活の豊かさや幸せを実現することができるとするロータリーの「サーピスの理念」The Ideal of Service は、今後とも不変であり、不滅である。牧師が宗教界で神の言葉を伝道する如く、シエルドンは、ロータリーの世界に「サーピスの精神」を伝えた伝道師であつたとのポール・ハリスの言を、しみじみと想起するものである。

(一九九四年九月)



ロータリーが当面する基本的課題

一、はじめに

現今におけるロータリーのあり方については、数多くの人々が、色々な角度や視点から、抽象的な形やあるいは具体的な形で、幾多の問題を指摘されている。そこで、国内のロータリー、国際ロータリー及びロータリー一般の三つの分野に区分して、それぞれの分野で私どもが当面している課題のうち基本的な問題を取り上げて、検討を加えてみたいと思う。

二、国内ロータリーの分野において

ロータリーの存在意義の中核は、いうまでもなく、「ロータリーの綱領」Object of Rotary に掲げられている「サービスの理念」The Ideal of Service である。と

ころが、わが国のロータリーの現実においては、この「サービスの理念」The Ideal of Serviceの理解が比較的不十分ではないかと思われ、そのことが数多くの問題の原因となっているのではないかと思われる。したがって、そのような基本的な理解とその成果のロータリアンへの効果的な伝達をはかるための努力が、すべてに優先する急務であろう。

いうまでもなく、私ども一人ひとり、一人だけで生きられるものではなく、他人の職業活動や社会的活動一般の成果を利用することによって、初めて豊かにかつ幸せに生きることができるとは。したがって、私ども自らも、社会を構成する当事者の一員として、自分が携わっている職業上の活動について最も良質の成果をあげるのももちろん、一般の社会的活動についても良好で充実した成果をあげ、これらを他人のため、社会のために提供して行く基本的な社会的責務を負っている。このことを厳しく自覚し、その実現のために努力を重ねなければならぬとする考え方が、「サービスの理念」The Ideal of Serviceである。

ところで、この「サービスの理念」The Ideal of Serviceは、「我」や「個人」

の確立と、個人が社会の当事者であるという欧米的な社会意識ないしは価値観を前提とするものであろう。キリスト教的な背景はもちろんあるが、さらにその奥にあるのは、結局において欧米的資質自体であろうと思われる。ところが、わが国を始めとするアジアの社会その他の非欧米的な社会では、どちらかといえば自分を取り巻く社会を他律的に与えられた生存環境であると捉え、これに適応することを以て人生の幸せであるとする受け止め方が強く、したがって、自分達が社会を構成しているとする当事者意識を前提とする「サービスの理念」[The Ideal of Service]と違った観念がどの程度存在するかどうかは疑問であるし、仮に存在するとしても、その発現の形態は、欧米社会とは相当に異なっているのではないかと思われる。現に、わが国の社会においても、「サービスの理念」[The Ideal of Service]と「観念、なかんなく」「サービス」Serviceという観念が存在するかどうかは、極めて疑問である。わが国における職業的な活動或いは一般の社会的な活動に伴う成果は、生活上の直接の手段とか社会的地位や力の象徴であるところからえられるか、あるいは逆に自己犠牲的な無償の奉仕行為であると位置付けられる

かのいずれかであった。したがって、一九二〇年（大正九年）にロータリーをわが国へ導入するにあたり、私どもの先輩ロータリアンの方々は、大変ご苦心の末、The Ideal of Service というロータリーの本質自体を規定する決定的用語に、「奉仕の理想」という訳語をあてざるをえなかったのであろう。ただ、先人の方々のご苦勞にも拘わらず、遺憾ながら、この訳語が The Ideal of Service という觀念の正確な理解のために必ずしも的確ではなく、むしろ紛わしい媒体としての一面もあつたことを認めざるをえない。現にポール・ハリスの著書『ロータリーの理想と友愛』This Rotarian Age を邦訳するにあたり、米山梅吉氏は、Service の語に「奉仕」の邦訳を決してあてられなかった。「サービス」と片仮名の訳語をあてていられるのである。私どもは、欧米諸国とわが国の間における社会意識や価値観その他の文化一般などの民族的資質の相違を克服して、「サービスの理想」The Ideal of Service の正しい理解とその周知措置について、あらためて遅まきながら、最善の工夫と努力を払わなければならない。しかも、そのこと以外にロータリーを正しく理解する方途はないことに、思いをいたさなければならな

い。また、そのような正しい理解がえられるならば、巷間指摘されるロータリー情報の不足や不徹底、職業分類の乱れ、「質か量か」に集約される会員増強や拡大の行き過ぎへの批判、「アイ・サーブかウイ・サーブか」に集約されるサービス活動の変質の指摘を始めとして、わが国のロータリーが当面する数多くの具体的な諸問題は、おのずと改善と解決に向かうのではないかと思われる。国際ロータリーにおいて決議二二—三—三四の廃止がしばしば繰り返し論ぜられるにも拘わらず、わが国のロータリーにおいてはその都度その存続が最も重要な課題として取り上げられていることや、ロータリーの精神面にかかるロータリー情報の念入りな提供の必要性がわが国のロータリーにおいて色々な形で強調されるのも、わが国のロータリアンが、わが国の社会意識の実情に照らし、「サービズ」Serviceへの根本的理解が如何に大切であるかをよく自覚している証左であろうと思うのである。

三、国際ロータリーの分野において

周知のとおり、一九九四年九月現在二六、九七九のロータリー・クラブが世界一八五の国家及び地理的地域に存在し、ロータリアンの数は一、一九〇、九二三人を数える状況にある。ところで、このような世界各地の国家や地域において、ロータリーは一体どのようなように受け入れられているのであろうか。ロータリーのロータリーたる所以ないしはロータリーの存在意義は、その綱領に規定される「サービス」の理念「The Ideal of Service」にあるが、この観念は、前述のとおり、個の確立と欧米社会の社会意識や価値観その他の文化観念を前提とするものである。しかしながら、世界のすべてが、このような個の確立や欧米的資質を体質とする社会であるわけではない。わが国を始めとするアジア的な社会はもちろん、インド、アフリカ、ラテン、アラブ、スラブその他の非欧米的な社会は、それぞれ独自の社会意識や価値観その他の文化観念と宗教を前提として存在し、しかも、そのような民族的資質と地域的、社会的条件は、歴史と伝統によって社会の実質として固着し、一朝一夕に変質するものではないし、また、安易に変質すべきもの

でもあるまい。そのような多様な世界の各地域に、欧米社会の「サービスの理念」The Ideal of Serviceをそのままの形で提唱して理解を求めてゆくことに、私どもは、あらためて、十分に冷静で慎重な検討を加えてみなければなるまい。

結論を急ぐならば、国際ロータリーは、独自の文化と社会意識や価値観を持つ世界各地の人々に、どのようにしてロータリーの掲げる「サービスの理念」The Ideal of Serviceを伝達し理解を求めて行くかについて、さらに一段の工夫と努力を尽くすべきである。また、単にそれだけではなく、さらに進んで、その掲げる「サービスの理念」The Ideal of Serviceの実質を、従前の欧米の体質の枠内だけに止めずに、世界のあらゆる人々に理解をされるように思想的な熟成をはかり、言語や習俗その他の障壁を多角的に克服して、世界の人類社会一般に通ずる普遍的な真理として充実させ、一段と高次のものに高めて行くように努めてゆかなければなるまい。そして、そのことだけが、ロータリー活動の真の国際化を実現し、自らもその名に恥じない本格的な国際的存在に成長する所以であることに、思いをいたすべきであろう。そしてまたこの意味において、世界のあらゆる

地域から選出される R I 会長が、毎年度ごとに、ロータリーの精神的要素をめぐる色々な見地からの見解を R I の年度テーマの形で全世界のロータリアンに呈示されている努力は、極めて意義深いものがあると思うのである。

四、ロータリー一般の分野において

私どもは、私どもの存在のあり方を検討するにあたって、資本主義や自由主義、あるいは共産主義や社会主義といった考え方のいずれが適切であるか、また、その手直しが必要だとすれば、どのような考え方で対処すべきであるかなどの論議に、多年にわたり埋没してきた。その必然的な結果として、私どもの社会生活やその管理が、このような経済的要素を決定的な前提として策定され運営されてくることとなったといつて過言ではないし、さらに、私どもの知的所産の最高の成果と称される科学がこれに参入して経済と手を携え、この両者の相乗効果が、私どもの社会のあり方の大半を決定して現時にいたっているといつても、過言ではない。

しかしながら、経済や科学は、私ども人間にとって、その生存のあり方を決めて行く上で非常に重大な要素であるとはいいながら、本来は存在の外的条件の域を一步も出ないものであることは、いうまでもない。人間の存在の価値は、結局において、その内的な精神的な内容によって決定されるものであるからである。人の内的存在が豊かになるためには、人を取り巻く経済や科学の成果が良好なものであることは有利ではあるろうが、逆に、経済や科学の成果がいくら良好に集積されても、それだけでは、人間の内的な成果を創り出し生み出すことは不可能であろう。そして、私どもは、社会主義の体制が崩壊した後における国際社会やブル経済が崩壊した後における国内社会の政治経済その他社会全般の騒雑な現状を眺めながら、私どもの人間社会において経済や科学が機能する限界を、いやというほどに今思い知らされているのである。現時の世界にあつては、私どもの色々な活動の総体が人間の心的容量や地球の物的容量の限界に近づきつつあるのではないかとの指摘がされているようである。そして、いわゆる欧米的資質の無制約な開発がその主な原因ではないかということが併せて指摘され、その延長線

上において、私どもの社会が経済と科学という二つの大きな要素によって余りにも多く支配され過ぎているその現実のあり方自体に、根本的な批判と検討の目が向けられ始めているようである。

いったい何が故に、私どもの社会はこのような現状に立ち至ってしまったのであろうか。まず、西欧的資質なканずく客観的な知能や科学という名のその自然への適用としての合理的資質が長年月に亘る宗教的試練を克服し、文芸復興を契機として開花し、次いで、これがいわゆる技術として具体化し、さらにこれが産業革命を起点とする各種の近代的な生産手段ないしは生産活動として欧米社会において機能的に結実し、その成果が逐次巨大な経済的実果として集積し、その組織的管理を行うために資本主義やその抜本的な批判と対案としての社会主義並びにその各修正形態などをめぐる経済的視点と体制が多角的に成立して世界に波及するにいたったという歴史の経緯は、私どもがすでに等しく教えられ理解しているところである。経済と科学による社会支配の現状は、このようなある程度の必然を伴った人間社会の歴史の流れの中に結果しているものであろうが、私ども

は、今やこのような現実に冷静で多面的な観察と評価を加え、さらに、果して人間の存在が経済と科学のみによってその大半が規定されるようなものであるのかどうか、そのようなものであつてよいのかどうかの点に、あらためて深く思いをいたさなければならぬのではなからうか。そして、その場合の省察は、人間に「知能」という特殊な資質が与えられていることがすべての問題の出発点であり、かつ同時に終着点であることの自覚からまずはじめなければなるまい。

私どもが手にした若干の豊かさや快適さは知能に由来するが、同時に、私どもが現在被っている堪え難い莫大な人間的な社会的な被害や自然的な障害も、知能の恣意的な開発とその利用に由来する。知能に由来する被害の解決の鍵が、知能の中にしか存しないことは、自明の理である。ここにおいて私どもは、知能の開発と利用は、都合のよい部分だけに着目して恣意的に行われてはならず、自然の一員である人間自体の存在にとつて一般に公正でありかつ有用であるように人間自らが自律的な自己制約を課しつつ行うべきものであることに思いいたるのである。そして、このことによつてのみ、私どもが過去において幾多の努力を重ねた

にも拘わらず未だに解決ができていない「競争本能のコントロール」や「個人の真の自己責任の社会における確立」という至難な問題を、はじめて解決の射程距離内に捉えることができることとなるものと思われる。いずれにせよ、人間活動を適正なものとすることによって健全な社会を形成してその維持発展をはかるために、人間の資質一般への外的な制約は相当程度不可避であろうし、科学は今後とも引続き無心のまま存在と進行をし続けようが、私どもは、このような人間の存在に加えるべき諸々の外的な制約を、単にやむをえないものとして他律的に受け入れるだけでなく、進んで自分の内からこれらを積極的に理解し自らが課したものとして精神的に支えてゆくよう努めることが必要であり、このような対応こそが、今後合理的な制約の中で本格的に社会の活性化を実現し持続し発展させる所以であろうかと思われる。そして、このことは、私どもが人間に内在する社会性の原質を真に自覚し理解し実践することによってのみ、はじめて実現することができることであろうと思うのである。

周知のとおり、ロータリーは、沿革的な見地からマクロに眺めるならば、アメ

リカの資本主義経済の発展に伴う各種の弊害を素直に認識しつつ、「サービスの理念」The Ideal of Service という普遍的な精神的価値を社会に呈示してその認識と理解を求めることによって、これらを是正し修正し解決しようとした精神的努力としての側面を色濃く帯有しており、その性格は、現時にいたるまで、歴代のロータリアンによって脈々と受け継がれてきているのではないかと思われる。ただ、右のような観点から光をあててみると、あるいはロータリーは、このような従来の歴史的使命をすでに終えつつあるのかも知れない。そして、今やロータリーは、経済と科学の陰に覆われて稀薄化した人間の内的存在の価値への意識を高めつつ、その掲げる人間の社会性の真の認識に立脚した普遍の真理「サービスの理念」The Ideal of Service が帯有する精神的価値を、必ずしも社会経済体制の如何に拘泥することなく、また単なる伴走的な付添人の立場から一步を踏み出して、より一般的な独自の立場で、積極的に社会に提供し、私どもの社会意識の中に深く広く浸透させるよう努力してゆかなければならないこととなっているのかも知れない。そして、個々のロータリアンが、自己自身だけでなく、自己が関係

する社会的経済的諸集団においてもこのような努力を重ねてゆくことこそが、現代社会が帯有する知能の制約とか競争の管理とか自己責任の確立といった困難な問題を一歩ずつ着実に解決する唯一の方途であるし、同時にロータリーに課せられた最も基本的な今後の課題であろうと思うのである。何故ならば、このような努力こそが、私どもの職業が私どもの社会が存立し私ども自身が生存して行くための否定することのできない本来的な基盤であることを繰り返し自覚して人間社会の根本的な倫理化を進めつつ、世界の政治経済の大きな壁を取り除かれた今日以降において国際社会全般に潜在し発現する人間固有の各種社会条件上の内在的な障害を克服し、人々相互の理解と親交を通じて地域社会から国際社会にいたるまで人間社会の全般的な福祉と平和を実現して、私どもの社会自体と私ども個々自他の幸せを実現してゆこうとするロータリーにとって、残された唯一不可避の有効な方途であると考えられるからである。

(一九九四年九月)

和魂洋才と「サービスの理念」

一、はじめに

「和魂洋才」といえば、すぐに「和魂漢才」という語を思う。そこで、「和魂漢才」を辞典であたつてみると、大体において、わが国固有の精神と、中国伝来の学問や知識や才能を併せ備え、両者を融合して活用をはかること、などとされていることは、周知のとおりである。従つて、このような意味を類推すれば、「和魂洋才」とは、わが国固有の精神と西欧伝来の学問や知識や才能を併せ備え、両者を融合して活用をはかることを意味することとなる。

ところで、何故いまごろこのような言葉をあげつらうのかといえは、この言葉の意味するところが、私どもの社会が現状にいたつた原因や経緯に深いかかわり合いがあるだけでなく、ロータリーの存在理由である「サービスの理念」The

Ideal of Service を理解するうえで、私どもが避けて通れない身近な体験事例としての資料的な価値を帯有していると考えられるからである。

二、「和魂洋才」とその周辺

翻って想起してみると、明治維新の初頭にあたり、私どもの先人達は、鎖国の目隠しを唐突に取り払われた驚きの眼で欧米社会の現状を眺め、わが国社会の物質文明の近代化の致命的な立ち遅れを目のあたりにして、科学的素因を主潮とする欧米文明の急速かつ組織的な学習の必要を痛感した。そして、急拠欧米の先例を模倣して、いわゆる明治の近代教育の体系をソフトとハードの両面から組織的に構築して実施した。わが国民は、全国民のレベルでこの制度を受け止め、主として知能の開発を目ざした欧米流の教育制度の推進を通じ、科学的知識と技術的能力を自らの選択に応じた水準によって重点的に着実に学習して修得し、その成果をわが国社会の各面各層にわたって具体化するにいたった。例えば、行政組織による社会の管理、企業制度による物資の生産や流通の管理などをはじめとし

て、立法、司法、教育、學術、医療、福祉その他の諸文化や社会的諸活動などの管理の全般にわたり、外面的で効率的な活用をはかつて今日にいたっている。第二次世界大戦の敗戦に伴うわが国社会の激甚な変動の試練にも拘わらず、わが国民に蓄積されていた外面的な物質的な側面を志向する資質開発の成果は、損なわれるどころか、その後の自由な戦後社会において却って発展的に持続し、わが国経済の爆発的發展の素因の有力な一つとなったことは、いうまでもない。

ところが、このような明治以来の人間資質の開発にあたり、内面的な精神的な側面は、どのような状況にあつたのであろうか。もちろん、欧米の精神文化は、わが国の少数の優れた文化人によって深く受容され承継されたであろうし、また、相当数のわが国民によって相当量の接触が一般にはかられたことも否めない。しかしながら、その成果は、限定されたものであつたし、また、比較的表面的な理解にとどまっていたのではなからうか。けだし、欧米の精神文化は、個々人における絶対的な個の確立と、社会は個人を当事者として個人のために構成されるという徹底した社会意識、及びこれらによって導かれる価値観を前提として存在す

るものであろうし、これらは欧米の人達のむしろ民族的な体質的な素因に根ざすものと考えられる。ところが、わが国において、このような個の絶対的な確立とか徹底した当事者意識を中核とする社会意識は、明治期以来終戦時まではもちろん、その後における自由な社会とされる今日的社會においてすら、明確な形で存在するとは考えられない。それどころか、私どもは依然として、周囲直接の地域社会や国家社会はもちろん、場合によっては国際社会ですら、他律的に与えられた生存環境としてそのままこれを甘受し、徒らにそのあるべき姿を論議するとか、その現状を批判するとか、これに逆らったりするとかよりは、むしろ温和に上手に周辺社会に順応し適応して生きて行くことこそ人生の幸せを手に入れる所以であると感応的に受け止め、いわば適応意識に基づく社会観の中に生きており、個の確立も、結局においてその範囲と限度内にとどまっているように思われる。いわゆる「赤信号、皆で渡れば怖くない」のである。横並びの意識、学歴社会、年功序列、終身雇用、会社人間、談合処理、系列化、人事の派閥化、既得権益の固着化など、わが国特有の社会慣行の数々の現状に徴しても、わが国におけ

る社会意識や価値観の実態が、一般的に右のようなものであることが明らかであると思われる。昨今、これらの社会的慣行を「破壊」することの必要が巷間声高く論ぜられているが、単なる現実的側面からだけの短絡的な表面的な指摘に終ってはならないし、また、漸く今そのような論議を行わなければならないこと自体、わが国の従前社会の現実を浮き彫りにして余りあるものといえよう。

本来、人間の資質のうち、精神的要素を志向する側面と物質的要素を志向する側面とは、一体不可離のものである。例えば、欧米的な資質について、個の確立や当事者的社会意識の徹底とこれらを前提とする価値観を中核とする精神的側面を仮に「洋魂」と呼び、科学的知能を中核とする資質の開発を庶幾する物質的側面を仮に「洋才」と呼ぶこととすれば、「洋魂」と「洋才」とは、本来有機的に一体のものである。わが国社会について、個の対応的な認識と適応的な社会意識及びこれらを前提とした価値観を中核とする精神的側面を仮に「和魂」と呼ぶならば、私どもは、明治以来の近代教育の実施によって、「洋魂」と「洋才」とを分離して「洋才」を集中的に学習して体得し、「和魂」と「洋才」とを器用

にかつ巧妙に結合して活用していることとなろう。この意味において、「洋才」の学習と活用は、ほぼ完全な形でわが国社会に定着するにいたつたとしても、過言ではない。しかも、「洋才」は、「洋魂」と一体のものとして活用されれば、自然の社会的制約が作用するが、「和魂」との牽連のもとに活用されるならば、「和魂」の帶有する一種組織適応的な独自の全体主義的な性格と結合して、絶大な威力を発揮する。戦後わが国が果たした空前の経済的發展の決定的要因は右のような点にあつたと考えられるし、わが国社会の異質性を他から声高く批判される所以も、またそこにあるかと思われる。

では、私どもの資質の開発が故にこのような跋行的な経過を辿ることとなつてしまつたのであろうか。そこには、色々な原因が考えられる。まず、明治の近代教育自体がわが国社会の物質的な外面的な側面の立ち遅れを早急に解決する必要から発想され、したがって私どもの資質のうち自然科学や社会科学の両面にわたり欧米流の科学や技術を中心とする外的側面が集中的に取り上げられたことが考えられる。しかも、明治の先人達が目のあたりにした欧米社会自体が、すで

に科学技術と経済のみに傾斜し、これに埋没しつつある社会であった。すなわち、欧米社会の原質である西欧的資質は、アングロ・サクソンの民族的資質が中期における宗教的な試練を克服し、その知能を中核とする科学的資質が引続く文芸復興期に一斉に開花し、次いでこれらが技術として具体化して産業革命の要因である生産手段の開発と拡大として結実し、その成果が巨大な経済実果として社会的に集積して社会の経済支配化が進行し、この傾向は科学技術と経済の相乗効果によって際限なく昂進し、その組織的管理の必要を充たすため、資本主義や共産主義あるいはそれらの修正形態をめぐる論議とその採否の当否が論ぜられて今日に至ったという歴史的経過のなかで成立したものである。そして、このような社会的背景の中で予定され設定された欧米の教育自体、彼らのいわゆる欧米的資質の科学的側面を重視するものとなっていたことは、むしろ当然の成行きであったのであろう。もちろん、明治期において、わが国社会は天皇を中心とする皇国史観が支配的な精神的環境となっており、欧米社会の「洋魂」の継受を不可能としていたのであろう。また、戦後においては、その反作用として、社会意識を

めぐる論議が私どもにとってアレルギーの要因となり、タブー視された結果、殆ど何らの検討もされないまま放置されて今日にいたったことも、見逃すことではできない。さらに、私どもと欧米の人達との民族的な体質的な資質の相違も、根本的な要因として存在するのも知れない。

三、「サーブスの理念」 The Ideal of Service の意義

ここで目を転じて「サーブスの理念」The Ideal of Service について若干の考察を行ってみたい。いうまでもなく、「サーブスの理念」The Ideal of Service はロータリーの存在意義自体であり、私どもは、ロータリーに入会することによって、国際ロータリーの定款第四条及び標準ロータリー・クラブ定款第三条に掲げられている「ロータリーの綱領」Object of Rotary 中の「サーブスの理念」The Ideal of Service を受諾し、その意義をしっかりと認識して実現して行くことが求められているのである。

ところが、一九〇五年ポール・ハリス Paul Percy Harris とその三人の仲間によ

ってロータリーがシカゴに創設されたときには、ポール・ハリスはもとより、何人も「サービス」Service といったことは考えておらず、ロータリーは会員の事業利益の増大と親睦その他社交クラブとしての必要事項の推進を目的としただけで、会員相互の互恵取引を目的とする友好クラブに過ぎず、その名称も、Food-Fun-Fellowship を略したFFFクラブという試案が真剣に検討されたくらいであった。ところが、創設後三年を経過した一九〇八年に入会したアーサー・フレデリック・シエルドン Arthur Frederick Sheldon は、当時利益のためには手段を選ばないという商道徳が地に堕ちた暗黒のシカゴにあつて、一体ロータリー・クラブにどのような存在意義があるのかということに深刻な疑問を抱き、公明正大な経営方針を堅持する商人が結局において成功を収めている現実に着目して、「他人の立場を考え、他人のためになるように尽くす」すなわち「サービスの精神に従つて行動する」者こそが成功するのだとの結論に達し、この「サービス」Service の考え方が「それがロータリーの存在意義であると断じ、「仲間」に最もよく奉仕する者は、最も多く報いられる」He Profits Most Who Serves His Fellows Best

との考え方を唱え、次いで「仲間に」を削ってこれを一般化して「最もよく奉仕する者は、最も多く報いられる」He Profits Most Who Serves Best という形で発表した。ポール・ハリスは、ロータリーの存在理由を確立することの必要を痛感し、シエルドンのこの意見を採用上げた結果、この「サービス」Service という考え方は、「サービスの理念」The Ideal of Serviceとして、標準ロータリー・クラブの定款や国際ロータリーの定款自体の核心である「ロータリーの綱領」Object of Rotary の中核の考え方として採り入れられて今日にいたっている。また、このシエルドンの「最もよく奉仕する者は、最も多く報いられる」He Profits Most Who Serves Best は、これに刺激されて直後に発表されたフランク・コリンズ B. Frank Collins の「無私^の奉仕」Service, Not Self (翌年、自己否定は適切でないとして、「超我の奉仕」Service Above Selfと修正)とともに、ロータリアンの人口に膾炙し、一九五〇年のデトロイトの国際大会で公式の標語 Motto とされたが、一九八九年のシンガポールの規定審議会^で、Service Above Self が第一の標語^に、He Profits Most Who Serves Best が第二標語^に指定されて今日にいたって

いることは、周知のとおりである。なお、この間の事情については、この地区の尊敬すべき先輩、故塚本義隆パスト・ガバナーのこの研究会におけるご発表とこれを収録された「サービス思想の意味するもの」の冊子に詳しい。二人が発表した標語は、シエルドンは出版関係者として実業人の立場から、コリンズは弁護士として専門職業人の立場から、それぞれ「サービス」Serviceを論じた結果、各表現にそれぞれの特色があり、またそれらへの批判もそれぞれの交錯的立場からされていて、興味深い。

人間は自己の責任を以て一人で生きて行かなければならないが、同時に一人では全く生きて行けない存在である。人間は物質的には衣食住をはじめ色々な需要を充たし、精神的にも他と補完し合って、はじめて生を全うすることができるものである。従って、人間は、社会において他人様の職業上の成果や一般社会活動上の成果の提供を受けてこれを利用させていただくことによって、はじめて豊かな生活と幸せを享受することができるわけであるから、反面、自分自身も、自分に与えられた職業活動はもちろん、一般の社会的な活動行為においても、少しか

も良質の成果を達成してこれを他人のために社会のために提供して行く社会的な責務を負っているといわねばならない。

人は、生まれながらに社会的な存在である。人は、その個性を中核として生きるものであるが、同時に、その社会性を決定的な原質として生きるものである。換言すれば、個人の独立性の自覚を前提としつつ、人間の社会性を自己の原質として厳しく認識し、この原質に基づく社会的責務の最善の実現に努めることを基本の倫理として生きるものである。このような社会的責務を自覚して実践することとが、「サービス」Service であろう。これは、本来は人間社会の根底を流れる普遍的な真理であろうが、なканずく欧米の社会にあつては、顕著なむしろ日常の社会意識であつたものであろう。シエルドンは、ロータリーの創設期に、すでにその存在と意義に気付き、これを明確に指摘して、ロータリーの世界に持ち込んでその基礎にしっかりと据え付けたわけであらう。一九一〇年シカゴの第一回ロータリー大会の計画を樹てて以来三〇年の永きにわたり初代事務総長を務めたチエスレー・ペリー Chesley R. Perry の組織的貢献は多大なものがあるが、ロータ

リーは、ポール・ハリスの発想と設計のもと、ペリーの組織したハードの中に、シエルドンが提唱した「サービス」Serviceの精神をソフトとして盛り込んで構築された、人間社会至高の作品といふべきものであろうか。ポール・ハリスは、シエルドンについて次のように語っている。「牧師が神の言葉を宗教界に伝道する如く、シエルドンはロータリーの世界に『サービスの理念』The Ideal of Serviceを伝道した伝道師であった」と。ポール・ハリスのこの言葉は、ロータリーの源流に占めるシエルドンの「サービス」Serviceの意義を、的確に指摘して余すところがないものといえる。

四、ロータリーが当面する基本的な諸問題

ところで、ロータリーは現在、国内的にも、国際的にも、一般的な存在の面でも、数多くの困難な問題に当面している。

例えば国内的には、わが国のロータリアンによって、ロータリーの核心である「サービスの理念」The Ideal of Serviceが真に理解されているであろうかという

問題がある。何故ならば、「サービスの理念」The Ideal of Service は、個の確立と個を当事者とする社会意識とこれらに基づく価値観、いわば冒頭で述べた「洋魂」を前提とするものであり、「洋魂」とともに初めてのみ初めて十全の理解が可能であろうと思われる。ところが、わが国においては、周辺の社会環境を他律的に与えられた生存環境として捉え、それへの対応の範囲と限度内でのみ個を認識するという適応的な社会意識と価値観、いわば冒頭で述べた「和魂」を前提とする精神的状況にあり、そこには「サービス」Service という観念が存在するかどうか疑問であるし、仮に存在するとしても、極めて稀薄であるだけでなく、その発現の形態も欧米社会とは相当に異なっていると思われる。したがって、わが国における職業的な活動や一般の社会的活動は、生活上直接の手段とか社会的な地位や力の象徴であると捉えられるか、あるいは正反対に、完全に自己犠牲的な無償の奉仕行為と受け止められるかの、いずれかであろう。そこで、大正九年（一九二〇年）にロータリーがわが国に移入されるにあたり、私どもの先輩ロタリアンの方々は、大変に「苦心の末」、「サービスの理念」The Ideal of Service

というロータリー自体を規定する決定的用語の邦訳として「奉仕の理想」という訳語をあてられたが、わが国社会に存在しない「サービス」Serviceの訳語を選択せねばならないという先人方のご苦勞にも拘わらず、この訳語がThe Ideal of Serviceの正確な理解のため必ずしも的確でなく、むしろ紛わしい媒体としての一面もあったことを認めざるをえない。米国における充実した留学体験を持ち、ロータリーの日本への導入に力を尽くされた米山梅吉氏が、Serviceの訳語として仮名書きの「サービス」をあてられ、「奉仕」の語を用いられなかったご見識が、今更の如く想起される次第である。「サービスの理念」The Ideal of Serviceの理解は、「和魂」のみでは大変不十分な不正確なものに終る惧れがあるといふべきであろう。反面、この点の正しい理解が得られるならば、巷間指摘されるロータリー情報の不足や不徹底、職業分類の乱れ、「質か量か」に集約される会員増強や拡大のあり方への批判、「アイ・サーブかウイ・サーブか」に集約されるサービス活動の質量のあり方や決議二二三―三四の存在理由をめぐる論議など、わが国のロータリーが抱える数多くの困難な問題も、おのずと改善と解決に向かう

のではないかと思われる。

私どもが目を国際ロータリーの場に転ずるとき、このような問題は、さらに複雑な様相を呈して来る。周知のとおり、現在二七、〇〇〇に垂んとするロータリー・クラブが世界一八五の国家及び地理的地域に存在し、ロータリアンの数は百二万人に垂んとする状況にある。ところで、このような世界各地の国家や地域において、ロータリーは、一体どのように受け止められているのであろうか。ロータリーのロータリーたる所以ないしはロータリーの存在意義は、その綱領に規定される「サービスの理念」The Ideal of Serviceであることは論を俟たないが、この観念は、前述のとおり、個の確立と当事者意識を基調とする欧米社会の社会意識や価値観その他の文化観念すなわち「洋魂」を前提とするものである。しかしながら、世界のすべてが、このような「洋魂」を精神的体質とする社会であるわけではない。わが国はじめ中国、韓国、東南アジア、インドなどのアジア的な社会はもちろん、アフリカ、ラテン、アラブ、スラブその他の社会は、それぞれ独自の千差万別の社会意識や価値観その他の文化観念と宗教などを前提として存在

し、しかも、そのような民族的資質と地域的社会的な条件は、歴史と伝統によって社会の実質として固着し、一朝一夕に変質するものではないし、また、安易に変質すべきものでもあるまい。そのような多様な世界の各地域に、欧米社会の「サービスの理念」The Ideal of Serviceをそのままの形で、換言すれば「洋魂」を当然の前提としたままで提唱して理解を求めて行くことに、私どもは、あらためて十分に冷静で慎重な検討を加えてみなければなるまい。

人は、自己が社会性を原質として生きる存在であって、その原質に基づく社会的責務の最善の実現に努めることを基本の倫理として生きるものであることを厳しく認識し、その充足によってのみ自己と社会の幸せを実現することができるものであることを自覚し、自己責任においてこれを実践して行くことを「サービスの理念」The Ideal of Serviceというならば、このような考え方は人間社会一般に通ずる普遍の真理であって、何も欧米社会に特有のものではない。ただ、個の絶対的確立と徹底した当事者意識に基づく社会認識を前提とする「洋魂」社会の方が、その認識が明確であらうし、またその実践を具体化することも比較的容易

なのであろう。ただ、「洋魂」の中から呈示された「サービスの理念」The Ideal of Service は、欧米社会特有の言語、表現、習俗、思想、宗教などの文化的な諸要素その他の社会的な形式の中に覆われて、本来の実質自体が存在している。同様に、わが国の精神的な風土であるいわゆる「和魂」やその他の非欧米的な社会の精神的風土にも、人間社会である以上、その普遍的真理である「サービスの理念」The Ideal of Service が存在し、また存在する筈であろうが、欧米のそれとは異なるそれぞれ特有の個性的な社会的形式の厚い壁の中に覆われて存在し、意外とその認識が困難である場合が多いのではなからうか。

私どもは、目下私どもに呈示されている欧米社会の「サービスの理念」The Ideal of Service から欧米社会特有の社会形式を捨象し、そのあるべき実質自体を純粹なものとして取り出したうえで、これを非欧米社会の人達に、その社会特有の社会形式の壁を注意深く排除しながら呈示して、その理解と実践を求めて行かなければならないのであろう。もとよりこのような作業は、「サービスの理念」The Ideal of Service の伝達と理解のために行われるべきものであり、移入された

「サービスの理念」 The Ideal of Service がそれぞれの社会形式の内においてこれらと有機的に存在し機能すべきものであることは、論を俟たない。そして、国際ロータリーは、このような工夫と努力を尽くすことこそが、はじめてロータリーの真の国際化を実現し、自らもその名に恥じない本格的な国際的存在に成長する所以であることに思いをいたすべきであらうと思われる。

五、ロータリーの将来の課題と展望

最後に一言付言すると、只今の人間の社会は、さきにも述べたとおり、科学技術と経済によってその大半を占拠されている状況にあるといっても、過言ではない。しかしながら、経済や科学技術は、私ども人間にとって、その生存のあり方を決めて行く上で非常に重大な要素であるといいながら、本来は外的条件の域を一步も出ないものであることは、いうまでもない。人間の存在の価値は、結局において、その内的な精神的な内容によって決定されるものであるからである。人的内的存在が豊かになるためには、人を取り巻く経済や科学技術の成果が良好な

ものであることは有利ではあろうが、逆に、経済や科学技術の成果がいくら良好に集積されても、それだけでは、人間の内的な成果を創り出し生み出すことは不可能であろう。そして、私どもは、社会主義の体制が崩壊した後における国際社会や、バブル経済が崩壊した後における国内社会の、政治経済その他社会全般の騒雑な現状を眺めながら、私どもの人間社会において経済や科学技術が機能する限界を、いやというほどに今思い知らされているのである。さらに、現時の世界にあつては、私どもの色々な活動の総体が人間の心的容量や地球の物的容量の限界に近づきつつあるのではないかとの指摘がされているようである。そして、いわゆる欧米的な資質の無制約な開発がその主な原因ではないかということが併せて指摘され、その延長線上において、私どもの社会が経済と科学技術という二つの大きな要素によって余りにも多く支配され過ぎているその現実のあり方自体に、根本的な批判と検討の目が向けられ始めているようである。経済と科学技術による社会支配の現状は、ある程度の必然を伴った人間社会の歴史の流れの中に結果しているものであろうが、私どもは、今やこのような現実に冷静で多面的な

観察と評価を加え、さらに、果して人間の存在が経済と科学技術のみによってその大半が規定されるようなものであるのかどうか、そのようなものであつてよいのかどうかの点に、あらためて深く思いをいたさなければならぬのではなからうか。そして、その場合の省察は、人間に「知能」という特殊な資質が与えられていることがすべての問題の出発点であり、かつ同時に終着点であることの自覚からまずはじめなければなるまい。

私どもが手にした若干の豊かさや快適さは「知能」に由来するが、同時に、私どもが現在被っている堪え難い莫大な人間的な社会的なそして自然的な被害や障害も、「知能」の恣意的な開発とその利用に由来する。「知能」に由来する被害や障害の解決の鍵が、「知能」の中にしか存しないことは、自明の理である。ここにおいて、私どもはまず、「知能」は完全に個人的資質であり、その開発と利用は個人の完全な自由に委ねられているという従前の単純な認識に、あらためて厳しい点検を加えねばなるまい。そして、「知能」という個人的資質も、人間に内在する社会性の原質内においてのみ存在し機能すべきではないかという「知能」の

社会的側面にも、相応の検討を加えねばなるまい。「知能」の開発と利用は、都合のよい部分だけに着目して恣意的に行われてはならず、自然の一員である人間自体の存在にとって一般に公正でありかつ有用であるように人間自らが自律的な自己制約を課しつつ行うべきものであろう。そして、この「知能の自己制約」によつてのみ、私どもが過去において幾多の努力を重ねたにも拘わらず未だに解決ができていない「競争本能の根本的なコントロール」とか、「個人の自己責任の社会における真の確立」という至難な問題を、はじめて解決の射程距離内に捉えることができることとなるものと思われる。いずれにせよ、人間活動を適正なものとするによつて健全な社会を形成してその維持発展をはかるために、人間の資質一般への制約は不可避であろうが、このような人間の存在に加えるべき諸々の制約を、単にやむをえないものとして外的に設定して他律的に受け入れることは、無意味であるどころか却つて有害であつて結局は失敗に終るものであり、このことは、歴史の数々の事例に徴しても明らかである。このような制約は、進んで自分の内から積極的に自覚し自ら形成して精神的に確立して行くよう

努めることが必要であり、このような対応こそが、今後合理的な制約の中で本格的に社会の活性化を実現し持続し発展させる所以であろう。そして、このことは、私どもが人間に内在する社会性の原質を真に自覚し理解し実践することによってのみ、はじめて実現することができることであろう。ここで私どもは、ロータリーがすでに「サービスの理念」The Ideal of Service という普遍的な精神的価値を提示していることに、思いいたるのである。

周知のとおり、ロータリーは、沿革的な見地からマクロに眺めるならば、資本主義経済の発展に伴う各種の弊害を素直に認識し、「サービスの理念」The Ideal of Service を社会に呈示してその認識と理解を求めることによって、そのような経済体制に伴走し付添いながら、これらの弊害を是正し修正し解決しようとした精神的努力としての側面を色濃く帯有しており、その性格は、現時にいたるまで、歴代のロータリアンによって脈々と受け継がれてきているのではないかと思われる。ただ、只今のような観点から光をあててみると、あるいはロータリーは、すでにこのような従来の歴史的使命を終えつつあるのかも知れない。そし

て、今やロータリーは、経済と科学の陰に覆われて稀薄化した人間の内的存在の価値への意識を高めつつ、その掲げる人間の社会性の真の認識に立脚した普遍の真理「サービスの理念」[The Ideal of Service]が帶有する精神的価値を、必ずしも社会経済体制の如何に拘泥することなく、また単なる伴走的な脇役や付添人の姿勢に自らを躊躇ちゆうちゆすることなく、そこから一步を踏み出してより一般的な独自の主役としての自覚に基づいて積極的に社会に呈示し、私どもの社会意識の中に深く広く浸透させるよう努力してゆかなければならないこととなっているのかも知れない。そして、そのことこそが、現代社会が帶有する「知能の制約」をはじめ、「競争の管理」とか、「自己責任の確立」といった困難な問題を、一歩ずつ着実に解決する唯一の方途であらうし、同時に、ロータリーに課せられた最も基本的な今後の課題であらうと思うのである。何故ならば、このような努力こそが、世界の政治経済の大きな人為的な壁が取り除かれた今日以降において、国際社会全般に本格的に発現する人間固有の各種社会形式上の内在的な障害を克服し、人々相互の理解と親交を通じて、地域社会から国際社会にいたるまで人間社会の全般

的な福祉と平和を実現して、私ども個々自他と私どもの社会自体の幸せを実現してゆこうとするロータリーにとって、残された唯一不可避の有効な方途であると考えられるからである。私どもわが国のロータリアンにとって身近な「和魂」のあり方と人間社会普遍の真理である「サービスの理念」The Ideal of Serviceとの相関を事例的に論じ、国際ロータリーの将来への期待に言及する所以である。

(一九九四年一〇月)

ロータリー理解推進月間にあたって

ロータリーの存在意義は「サービスの理念」The Ideal of Service にあり、私どもは、ロータリーに入会することによって綱領中の「サービスの理念」を受諾し、その意義をしっかりと認識して実現して行くことを自覚している。

人間は自分の責任で一人で生きて行かなければならないが、同時に一人では全く生きて行けない存在である。人間は、他人様の職業や社会活動の成果を利用して、物質的に衣食住をはじめ色々な需要を充たし、精神的に他と補完し合って、はじめて生を全うすることができる。従って、自分自身も、自分の職業や社会活動の少しでも良質の成果を他人のために社会のために提供して行く社会的な責務を負っている。このような社会的責務を自覚して実践することが、「サービス」Service であろう。本来は人間社会の根底を流れる普遍的な真理であり、欧米の

社会にあつては、日常の社会意識なのであろう。

ロータリーは、現在数多くの困難な問題に当面している。例えば国内的には、ロータリーの核心である「サービスの理念」が真に理解されているであろうかという問題がある。何故ならば、「サービスの理念」は、個の確立と個を当事者とする社会意識や価値観を前提とするものであるが、わが国においては、周辺の世界環境を他律的に与えられた生存環境として捉え、それへの対応の範囲と限度内でのみ個を認識するという適応的な社会意識と価値観を前提とする精神的状況にあり、そこにはサービスという觀念が存在するかどうか疑問であるからである。一九二〇年ロータリーのわが国導入にあたり、*The Ideal of Service* という決定的用語の邦訳として「奉仕の理想」という訳語があてられたが、わが国社会に存在しない「サービス」を邦訳する作業の困難さはともかく、この訳語は的確ではなかった。米山梅吉氏は、*Service* の訳語として仮名書きの「サービス」をあて、「奉仕」の語を用いられなかった。

国際的な場では、問題はさらに複雑な様相を呈して来る。「サービスの理念」

は、前述のとおり、欧米社会の個の確立と当事者意識を基調とする社会意識や価値観を前提とするものであろうが、世界のすべてがこのような精神的体質の社会ではない。それぞれ独自の社会意識や価値観と宗教などを前提として存在し、歴史と伝統によって民族的資質や地域的な社会的な条件が多様な世界の各地域に、欧米社会の「サービスの理念」をそのままの形で提唱して理解を求めて行くだけでよいものであろうか。元来「サービスの理念」は、人間社会一般に通ずる普遍の真理で、欧米社会に特有のものではないが、欧米社会特有の社会的な形式の中に覆われて存在している。同様に、わが国はじめ非欧米的な社会の精神的風土にも、人間社会である以上、その普遍的真理である「サービスの理念」が存在しているのであろうが、それぞれ特有の社会的形式の厚い壁の中に覆われて存在し、意外とその認識が困難である場合が多いと思われる。私どもは、「サービスの理念」から欧米社会特有の社会的形式を取り除いて純粋なものとして取り出して、非欧米社会の人達にその社会特有の社会的形式の壁を注意深く排除しながら呈示して、その理解と実践を求めて行かなければならない。このような工夫と努力を

尽くすことで、ロータリーの真の国際的な理解が実現するであろう。

さらに付言すると、只今の私どもの社会は、欧米流の人間資質の無制約な開発の結果、経済と科学技術によってその大半を占められ、人間自体とその環境に課せられた障害は、殆ど私どもの存在の容量の限界に近づきつつある。なかんずく、知能は、個人的資質の中核であることを当然の前提として、その開発と利用が個人の自由と恣意に委ねられているが、人間の存在自体が社会の制約に服する以上、知能もまた例外ではありえない。ただ、知能に対する外的制約の限界は、歴史的に実証済みである。知能に対する制約は、人の心の内に自覚され形成されるものでなければならぬ。ロータリーの提唱する「サービスの理念」は、正にこの要請に応えるものであろう。私どもは、サービスの理念の普及により、未だに解決できていない知能の内的な制約の形成、競争の適切な管理、真の自己責任の確立といった根本課題の解決に向けて着実に前進し、人間社会に真の相互理解と平和を実現しうることとなるのではないかと思うのである。

(一九九四年十一月)

IGF (都市連合一般討論会) について

一、はじめに——IGFの沿革

IGFは、いうまでもなく、Intercity General Forumの略称で、都市連合ゼネラル・フォーラムとか、都市連合一般討論会などと訳されている。ロータリーの情報及び教育のための実際的でかつ有効な手段として奨励されてきたことは、周知のとおりである。このフォーラムは、ロータリー・クラブの集団が、その集団の中心地に全会員を招き、RIの現役員または旧役員などの経験あるロータリアンをリーダーとして、ロータリーの一般の性格や計画などについて研究し討論する会合の形をとって開催されることが多い。ロータリー情報を広める手段として、できるだけ多くのロータリーの世界の土地にIGFを開き、RI会長が指名するリーダーが司会するようにすることが、一九四九—五〇年度のRI理事会で

決定され、次いで、R I 会長が指名するリーダーによる完全なプログラムを実施するだけの出席者が期待できないような場合には、地区ガバナーがリーダーをその地区または近隣の地区から求め、夜または午後と夜の集会として、R I に費用の負担をかけずに開催するように奨励することが、一九五七—五八年度のR I 理事会で決定されている。

ところで、I G F の開催を決定したR I の一九四九—五〇年度の理事会は、同時に、クラブ・フォーラム Club Forum の開催をも決定した。すなわち、ガバナー公式訪問の際、その他、年度の適当な時期にクラブ・フォーラムを開催し、地区ガバナーがクラブ単位のロータリー情報の普及強化を行うべきものとした。これが、私どもが現在主として各奉仕部門ごとにクラブ・フォーラムを開催している根拠である。ただ、一九四九—五〇年度の理事会の決定では、双方を一括して、Intercity and Club General Forum の標題が用いられたために、都市連合ゼネラル・フォーラムにいったんI C G F の略称があてられたが、クラブ・フォーラムと一括するのは適当でないとして、その後I G F の略称が用いられるように変

更されたものと思われる。

このように、IGFはRIの理事会で正式に決定された会合で、廃止を決定されたわけではない。現に、RIから各クラブに送付されている「委員会資料」の「ロータリー情報」の部分中には、「特別会合」の項目中に、例会のほかにロータリー情報を伝える手法でクラブで十分な成果を上げてきたものとして、家庭集会、クラブ・フォーラム、クラブ協議会とともに、インターシティ・ゼネラル・フォーラム（IGF）が取り上げられている。そして、ロータリー情報と教育を提供するうえで実際的かつ効果的な方法がIGFであり、これは複数のロータリー・クラブの全会員が、事業上の道徳的水準や世界的視点などのロータリーの一般的なプログラムの特色を検討するために集まるもので、経験を積んだロータリアンがこのフォーラムを司会すべきものと記載されている。

二、IGFFとIM

ところが、わが国のロータリーの世界では、何故かIGFが廃止されて新たに

IM (Intercity Meeting) が設けられたとか、IGFがIMと変更されたといった見解から、IGFを開催せずにIMを開催するといった実情が支配的となり、わが国の地区の中でIGFを開催しているのはRI第二六六〇地区だけとなっているような状況にあるものようである。しかしながら、この見解は誤りであって、IGFとIMはRIの公式の会合として双方とも並存し、その選択は地区ガバナーに任されていると考えるべきであろう。確かに、一九八一年度版以降の手続要覧のロータリーのプログラムの項目中から、IGFの記載は削除されている。しかし、このことはIGFが正式に廃止されたことを意味するものではない。そもそもIGFは、USCB (アメリカ、カナダ、バミューダ、プエルトリコ、ガイアナ、スリナム、仏領ギアナ、一部のカリブ海沿岸諸国) の地域では評判の良いプログラムではなく、事実上あまり実施されなかったし、実施しているのはわが国とアジア地域の数カ国にすぎないという実情から、手続要覧から削除されただけのことであろう。一方のIMと略称される Intercity Meeting は都市連合会と訳され、近隣都市の数クラブが集まって、親睦と情報教育及び意見交換を

行ふ会合とされる。もちろん、東京、大阪のような大都市にあつては、その一つの都市の中の一定ブロックの数クラブが集まる場合であつても、一向に差支えない。一九一二年にサンフランシスコとオークランドの両市のサンフランシスコ湾を挟んだ二つのロータリー・クラブが合同で例会を開催したところ、双方のロータリアンの親交を深め知己を広めるうえで非常な成功をおさめたので、「湾越しの愛の宴」Transbay Love Feastと名付けて継続することとしたことを嚆矢とし、一九一四年には当時のロータリー・クラブ連合会から正式に公認され、RIに引き継がれている。遅くとも一九六〇年以降の年次報告には記載されているが、その記載は、ロータリーのプログラムの中の項にあるわけではない。一九九二年度版の年次報告で見れば、地区ガバナーの任務として、「各クラブに対し、少なくとも毎年一回は都市連合会に参加するよう奨励する」ことが記載され（四五頁）、分区代理の一般的任務として、「分区内の都市連合会を計画準備する」ことがあげられるとともに、分区代理の長所として、「分区代理のいないときよりも多く都市連合会を開催できる」ことが記載され（四九頁、五〇頁）、さらに、標準口

「ロータリー・クラブ定款第七条第一節に規定される例会欠席のメークアップとなる
会合として、その(a) iiiの末尾に、「正式に公表されたロータリー・クラブの都市
連合会」に出席することがあげられ（二六七頁）、断片的に触れられているにすぎ
ない。従って、IGFが廃止されてIMが新設されたとか、IGFがIMに変更
されたとの見解は、明らかに誤りというほかはない。

以上の次第で、IGFとIMとは現時のRIに並存しているというべきであ
る。並存というよりは、厳密には本来IGFはIMの一部というべきであろう。
近隣数クラブの会合には、より広い範囲のロータリアンの間で、親睦を広め、ロ
ータリー情報の周知をはかり、関係意見の交換を行うという双方の目的と効用が
あると思われるが、そのうち、親睦面を強調する場合はIMといい、ロータリー
情報面を強調する場合はIGFというべきであろうと思われる。綱領に掲げられ
ているロータリーの唯一の目標である「サービスの理念」The Ideal of Service
は、当事者意識を根底とするアメリカの社会ではむしろ日常の常識であり、特段
の認識の喚起は必要ではなからうが、適応意識を主潮とするわが国の社会では、

この「サービスの理念」の認識と理解並びにその周知と徹底がなければ、ロータリー自体に対する基本的な理解と活動が成立しないと考えられ、しかもその成果が必ずしも十分ではないと考えられるわが国ロータリーの現状を前提とするときは、近隣数クラブによる合同の会合は、ロータリー情報の周知徹底を主たる方針として開催すべきであり、その呼称もIGFの略称を引続き継続すべきであるとの意見も、十分に傾聴に値すると考えるものである。

(一九九三年二月)



クラブ奉仕（クラブ・サービス）あれこれ

一、はじめに

クラブ奉仕（クラブ・サービス、Club Service）の仕事は、クラブの土台造りであるといわれる。一つひとつのロータリー・クラブこそがロータリーの存在と活動の原点であるから、クラブ・サービスはロータリー活動の出発点であるといつても、過言ではない。

二、クラブ・サービスの要素

ところで、一口にクラブの土台造りといっても、そこには色々な要素がある。例えば、第一に、クラブ運営の一般的な管理の的確かつ有効な実施がある。第二に、クラブの人的基礎の確立がある。第三に、クラブの物的基礎の確立がある。

第四に、地域社会におけるロータリー・クラブの存在の確立とその意義の強調などが考えられる。

第一のクラブ運営の一般的な管理の的確かつ有効な管理の実施は、管理主体としての理事会の存在を大前提として、会長、副会長、幹事、SAAなどの職責とされ、事務局がこれを支えることとなっている。

第二のクラブの人的基礎の確立には、さらに色々な側面がある。例えば、(1)地域社会における客観的存在としてのクラブの会員組織の実態の確保(2)ロータリー・クラブとしての精神的基盤の確立(3)良好な会員の獲得(4)会員相互の理解と意思疎通の促進及びクラブ活動への会員参加の確保と強化(5)活動のための資料の蒐集整理と会員への提供の充実などである。これらの機能は、本来は会長以下の役員と会員全員によって処理され実現されるべきものであるが、担当する委員会としては、(1)は職業分類、(2)はロータリー情報、(3)は会員選考と会員増強、(4)は親睦活動と出席、(5)はクラブ会報と雑誌とプログラムなどであろう。文献や規定などの委員会が設けられた場合の職責は、(5)に属することとなる。

第三のクラブの物的基礎の確立は、会計やSAAの職責で、事務局がこれを補助することになるであろう。

第四の地域社会におけるロータリー・クラブの存在の確立とその意義の強調は、会長はじめ役員の職責であるほか、委員会としては、広報の担当であろう。

三、クラブ・サービスの特徴

クラブ・サービス部門の特徴は、このような特定の分野を担当する各委員会の機能が、どの一つも欠けることが許されない不可欠なものとして分化独立して予定され、それぞれが独自に活発な活動を展開することが期待される一方で、各個ばらばらではなく全体として有機的な一体としての活動が行われることによつて、初めて所期の成果を上げることができるととされている点にある。そこで、本来は、推奨クラブ細則第七条第一節(c)項によつてクラブ奉仕委員会の委員長は理事のうちから会長によつて任命されるとされていながら、現実には、副会長が担当することが慣例となっているのも、そのようなクラブ・サービス部門

の特性が重視される結果であろうと思われる。なお、周知のように、先般のアナハイムの規定審議会で推奨クラブ細則第七条第二節(d)項が改正され、職業分類、会員選考、会員増強、ロータリー情報の四つの委員会については、会長の命により、会長エレクトまたは副会長がその監督及び調整にあたることとされたが、これは、RIがその現状に照らしこれらの四つの委員会の機能を重視していることの表われと思われる。もつとも、これは推奨クラブ細則の規定であるから、各クラブにおいて必ずしもこの通りにしなければならないとも考えられないし、従来慣例のように副会長がクラブ・サービス部門の全委員会の監督調整にあたることとした方が、今回の改正の趣旨に配慮しつつ、各面におけるクラブ・サービス活動の一体としての有効な運営を確保する上で、より適切であるといえるかも知れない。

四、各論的事項

最後に、若干気の付いた点を各論的に触れてみたい。

(1) 職業分類は、いわばその地域社会の職業の横断面であり、クラブの存在の客観性を担保するための基本的な作業であろう。

(2) ロータリー情報は、会員自身が過去、現在及び将来に亘るロータリーの実情を勉強することを通して、ロータリーの考え方をよく理解し、ロータリーのロータリーたる所以である精神的な基盤を構築する作業であろう。当事者としての社会意識が稀薄な我が国では、ロータリーの精神的中核として綱領の中心に挙げられてゐる The Ideal of Service 「サービスの理念」の念入りな勉強が特に必要と思われるほか、会員候補者や新しい会員には平易な情報を、一般の会員には平均的に行き届いた情報を、クラブ役員や特に関心の深い会員には専門的な情報を、それぞれ適切な形や内容で提供することや、時代に関係なく全く変らない基本的な情報と、時代とともに流動する新しい情報を併せて提供することや、手法や手続に関する煩鎖な情報よりも、本質的な考え方自体に関する根本的な情報の簡明な提供に力を入れることなどが大切かと思われる。

(3) 会員選考は、新たな会員の獲得にあたり、その適格性を確保するための重

要な機能を果すものである。その基準は多々規定されているが、要は、ロータリー精神の中核である「The Ideal of Service」[サービスの理念]を既に持ち、あるいは将来持ち得る人であるかどうかの点に帰着すると思われる。

(4) 会員増強は、適格で有力な新しい会員を獲得し、クラブの活動の力を強化するとともに、地域社会におけるロータリーの考え方や活動をより効果的なものに高めて行くための努力で、本来はロータリアン一人ひとりの基本的な責務であろう。

(5) 出席は、すべての会員にクラブ活動に参加する心と意欲を育て、かつその成果を高める活動であろう。従って、例会はもちろん、クラブ内のフォーラムなどの勉強会や会員懇親会などの親睦的な諸会合だけでなく、外部のIGF、IM、地区大会、国際大会などの会合への出席も対象となるし、その成果の評価も、単に数量的なものだけでなく、色々な会員がくまなく出席しているかどうかなどのいわば出席の質も大切であろう。

(6) 親睦活動は、会員相互の知り合いの機会を充実させることにより、相互の

理解を深め仲間意識を高めるための努力であることはいうまでもない。本来はサービス（奉仕）のための親睦であるから、表面的な形式的な親睦やあるいは一部に偏った親睦などは不十分であろう。サービス（奉仕）活動を通じての親睦こそがロータリーの真の親睦であろうし、サービス（奉仕）活動と親睦活動とが相俟って相乗効果を発揮することが望ましい。

(7) クラブ会報は、クラブの新聞である。クラブの動態を時々刻々と記録しつつ会員に周知させるとともに、親睦の活性化や情報提供の充実に資するものであろう。

(8) 雑誌には The Rotarian と「ロータリーの友」があるが、前者はロータリーの機関誌であり、後者はわが国におけるロータリーの公式の地域雑誌である。私どもは、国際ロータリー細則の規定でそのいずれかの講読を義務付けられているが、その内容はロータリー情報の宝庫であるから、これに親しむことは、ロータリー活動を活性化し、私どもがロータリアンであることの意義を高めるために、不可欠の努力であろう。

(9) プログラムは、知り合いと職業への認識を深めつつ、情報の入手と親睦の実現への機会を提供するもので、内部卓話だけでなく、月間卓話の効果的な提供も大切であるし、なканずく外部卓話は、いわばクラブが社会に向けてあけた窓ともいべきものであつて、今日の激しい変化の時代には、大切な機能と効用を果すものである。

(10) 広報は、ロータリーの主張の地域社会への提供である。「サービスの理念」を中核とするロータリーの考え方は、ロータリーだけの独占物でなく、人間社会一般の普遍的真理である実質に着目すると、広報は、本来ロータリアン一人ひとりの基本的な責務といべきであろう。

(一九九三年四月)

ロータリーの雑誌

一、はじめに—雑誌月間

周知のように、毎年一月の最後の週（その一部が二月にかからない週）を雑誌週間とする試みは、遠く The Rotarian 誌が創刊された一九一一年に遡って各地のロータリー・クラブで事実上行われていたが、正式には一九五八年の R I 理事会で決定され、次いで一九七八年の R I 理事会の決定でこれが毎年四月の最後の週と変更され、一九八二年の R I 理事会の決定で週間が月間に変更された結果、現在のようになり、毎年四月が雑誌月間と定められている。雑誌月間では、各ロータリー・クラブにおいて、雑誌に関するプログラムを発表し実施しなければならぬということとされていることは、いうまでもない。

二、ロータリーの機関雑誌と公式の地域雑誌

ところで、国際ロータリー細則第一七条の規定によって、ロータリーの機関雑誌は、一九一一年に創刊された英文の The Rotarian 誌と、そのスペイン語版の Revista Rotaria 誌とされていたが、経済的な理由で後者が廃刊となったため、現在では The Rotarian 誌だけとなっている。

さらに、一九九三年四月現在、世界二八カ国で三一種類に及ぶロータリーに関する地域雑誌が刊行されており、そのうち二二種類が R I 理事会によって「公式の地域雑誌」に指定されている。この「公式の地域雑誌」は、一九七七年の規定審議会の決議によって生まれた。地域雑誌は自然発生的に世界各地に色々とあつたものであるが、R I がその中から情報伝達の公式の手段として一定の要件を充足するものを「公式の地域雑誌」として指定し、その講読を The Rotarian 誌に代わるものとして会員に義務付けることとした。その一定の要件とは、R I の指定記事を掲載すること、年四回以上刊行すること、記事の五〇%以上がロータリーに関するものであること、毎年七月号の表紙に新年度の R I 会長の写真を使用

することなどである。

三、「ロータリーの友」

「ロータリーの友」誌は、わが国におけるこのような公式の地域雑誌で、昭和二八年（一九五三年）一月に創刊されたので、すでに四〇年の年月を閲している。

「友」は、全国のガバナーで組織されるガバナー会が委嘱した「ロータリーの友」委員会の管理と監督下にあるロータリーの友事務所で編集され刊行されており、各地区から一名あて選任された地区委員が、地区と事務所との連絡、編集への参画、講読の普及の促進などに携わっていることなどは、周知のとおりである。

「友」には、ロータリーに関する基本的な情報と流動的な情報の紹介と解説、RI、各地区、各ロータリー・クラブの国際レベル、地区レベル、国内レベルでのプロジェクトや活動の実績の紹介、すぐれた講演の記録、ロータリアンの個人的意見や趣味の発表などが豊かに多彩に掲載され、広い意味におけるロータリー情報の宝庫といふべき素晴らしい内容が盛られている。従って、「友」の横書き

の部分の一年分を継続して読んだだけでロータリーのことは一応マスターできるとか、さらに講読を継続すればロータリーの時代の進行に遅れることはないなどといわれている。そして、一九九一年一月には、世界中の公式の地域雑誌の編集長が参加して開催されたセミナーの席上で、「友」は、環境保全、ロータリーの真のイメージの普及、国際報道、内容改善の努力、デザインの優秀さなどのすべての諸点で最も優秀であるとして、RI会長から総合優秀賞を与えられるという最高の評価を受けた。ところが現実には、相応の精読者は三分の一以下、全く読まない会員が三分の一を数えるといった実情で、購入して積んでおくだけの「読まれざるベストセラーズ」と揶揄されかねない状況にあるようであり、この現実のままことに残念というほかはない。その原因として、左開きのRI指定記事を中心とする情報記事がややもすれば直訳文体でわが国の言語感覚にそぐわないため読みづらいつか、内容的に面白くないとか、字が小さ過ぎるとか、興味のある一般的な話題に乏しいとか、読む時間がないとか、色々な理由があげられている。感覚的に読みにくいという点は確かに一理があると思われるので、ご苦労いた

いている翻訳担当の方々さらに大変困難で無理な作業をお願いすることになるとは思うが、表現しようとする基本的な内容を中心に的確で簡易で大胆な意識文体を私どもの感覚に合わせて考えてみるなどの工夫を重ねることも、今後とも是非必要であろう。しかし、その他の理由は、果していかなるものであるうか。

私は、ロータリアンが「友」を読まないという問題は、多くの日本人が一般的に本格的な本に親しまないという根本命題の単なる一症例に過ぎないと考える。元来、社会の当事者の一員として考え行動するというよりは、周囲の社会を単なる生存環境として捉え、それへの適応をはかって行くという適応意識を中心とする社会にあつては、人々は物を考えることが不得手であり、その当然の結果として、いわゆる本格的な媒体手段に親しむことに熱意がないだけでなく、むしろ苦手とする。このように、地史的なあるいは社会的な諸原因によって思想的省察の未成熟なわが国民は、却つてそのことの反射的效果としての未曾有の経済的繁栄の渦中に投げられ、これへの適応をはかるために、極端な知的偏向の競争教育と、これに続く過度の競争体質社会に生きること終始することを余儀なくされ、日

常生活において精神的な余裕を失い、疲れ切っている。その結果、社会的価値観の混迷が瀾漫し、わが国民の多くは、ごく目先の当面役に立つ事柄以外には個性的興味や本質的関心を喪失し、ひいては人間や社会を学ぶための読書その他の自己研修の努力の欠落を結果し、これらの悪循環は深刻化して殆ど改善の兆しはない。今日におけるわが国の社会的混乱は、正にこのような精神的荒廢の延長線上の事態であり、広い意味での教育への視点を明らかにしつつ、国民の一人ひとりの自助努力によって、時間をかけて根本的な改善をはかって行く以外に、解決の途はないのでないかと思われる。なかでもロータリーは、人間を考え、社会を考え、そしてサービスを行動するロータリアンの集団である。根底にロータリーの思想という理念が存在することが、その存在と活動の絶対の前提であり、それがロータリーの精神的資質というべきものと考ええる。従って、ロータリアンが「友」を読まないという問題は、よほど真剣に反省を加えてみなければなるまい。

四、ロータリアンに対する「ロータリーの友」講読の勸奨

私どもロータリアンは、ベテランの会員であっても、また、比較的新しい会員であっても、基本的な情報を繰り返し読んで理解を深めて行くとともに、日々新しい流動的な情報に接してこれを逐次取り入れて行かなければならない。また、私どもは、私どもが生活する地域社会の特性への認識を深めることはもちろん、根底に統一性を求めながら多様性に固着した現実から決して脱却することができない国際的環境への理解を深めることにより、人々の間に実り豊かな相互理解を進め確かめて行かなければならない。そして、そのような努力なくしては、この激しい変化に押し流されて行く現在の社会の渦の中にあつて、時代の要請に即応した活力溢れるロータリー活動を弾力的にかつ効果的に展開し、遂行し、自他の幸せの実現を目指して進んで行く意義深いロータリーの世界の中に身を置くことは、到底不可能であろう。ここにおいて、私どもは、このような目的のために、適切なロータリーの情報を適切かつ豊富に手に入れてロータリーへの理解を深めて行かなければならないが、そのために最も身近で手取り早い手法は、会員自

身が毎月一冊の「友」を読み続けることである。文体に慣れ、読み癖が付けば、しめたものである。例会や週報などで雑誌委員会やロータリー情報委員会が記事を紹介したり、記事のダイジェストやポイントのコメントを作成して会員に配布したり、クラブ・フォーラムなどで討論の資料に供したり、会員に読後の感想の発表を求めたり、会員の投稿を勧奨して掲載された会員を表彰したり、アンケートを実施したりすることなども、クラブとして「友」を会員の身近なものとするために取るべき大変有効な手段であろう。

五、一般社会への「ロータリーの友」の紹介

さらに、私どもは、クラブの内部だけではなく、外部の一般社会の人々にも、「友」を読んで頂くよう努力しなければならない。例えば、まず家族や友人に提供して読ませたり、提唱しているローターアクト・クラブやインターアクト・クラブの会員やロータリアン以外の卓話者に贈ったり、病院、銀行などの待合室や、地元の新聞社、図書館、学校、諸官庁、公私の団体などの施設に寄贈したり

することである。また、毎年二回、十一月と四月に「友」の英語版が「友」と同様にロータリーの友事務所から刊行されているが、ローターアクター、インターアクター、青少年海外協力隊などの海外派遣、国際大会や国際協議会への出席、会員の海外出張の際などに携行を求めるとはもちろん、外国人の各種奨学生や留学生、青少年交換学生、研究グループ交換の隊員や、そのスポンサークラブや関係クラブ、姉妹クラブやその会員家族、世界社会奉仕活動の相手方や関係クラブ、外国人卓話者やビジター、外国のガバナーやロータリアンの友人、外国人教師や学生生徒などに贈ったり、地方公共団体、大学、高校、YMCA、図書館、会員の海外取引先、国際姉妹都市などに贈呈したりすることも、効果的である。

六、「ロータリーの友」とロータリアンの友

「ロータリーの友」は、「ロータリアン」の「友」である。私どもは、このすぐれた友人を、もっと大事にしなくてはならない。彼は、落着いたよい顔を持ち、「サービスの理念」というロータリーの中核的精神の強靱な持主であるだけでない

く、すぐれた叡智、心からの友愛、優雅で多彩な談話などの能力の持主でもあり、さらには、生きるための心の支え、豊かな趣味、ためになるささやかな助言などを忘れない素晴らしい誠実な友人で、しかも、日常つねに私どもの身边にあり、いつでも語りかけてくれる。この友を活用しない術はない。この友を活用できるのはロータリアンの特権であることにあらためて思いをいたし、この友によって私どもの心と生活を豊かにするとともに、この友からよりよい社会を目指す活動を支える心の糧をしっかりと手に入れなければならないと思うのである。

(一九九三年六月)



ボランティアとロータリー

一、はじめに

周知のとおり、阪神・淡路大震災を契機として、わが国の各界各分野において俄かにボランティアの意義が声高く論ぜられ、政府もボランティア団体の法人化と税制上の優遇措置を構想して市民公益活動法人制度の創設を目的とするボランティア法人法の立法化を進めているし、企業や学校においても、ボランティア活動に一定の組織的評価を与えようとする気運が進む現状にある。

二、ボランティアの内容

ところが、一口にボランティアといっても、その内容は多岐にわたりかつ多様である。市民としての日常生活におけるささやかな便宜から重篤な障害者や高齢

者への困難な介護にいたるまで、様々な相互扶助の提供を意図して実践しようとする具体的立場もあれば、私どもの存在自体のあり方や受け止め方に基づいて、相互扶助の活動に精神的な拠り所を提案しようとする抽象的な立場もある。後者についていえば、さらに、宗教的な信念とか、絶対的な人間愛や、人間の社会性の真の自覚などが拠り所として提示されている。そして、その内容にこのように多元的な要素が挙げられるところに、ボランティア問題が複雑な人間存在に占める価値の高さが象徴されているのではないかと思われる。

三、ボランティアの心

ところで、ボランティアは実践であり、実践によってボランティアの理解が進み、これに伴ってその活動がさらに豊かなものになることはいうまでもないが、単なる実践の継続だけでは意義が少なく、やがては活動自体が適応と発展に乏しい結果に終るとされる。そしてボランティアには、その核として、心が必要であるといわれる。ボランティアの心である。常に他を顧み、他を想い、自らの意志

で、自主的に、報いを求めることなく、積極的に、他のために働きかけ役立って行こうとする心、それを自分のこととして受け止め、それが自分の幸せと受け止める人間としての真心であるといわれる。

従って、ボランテニアの心は、人間の人間たる所以の大きいなるものの一つである。いうまでもなく、人間の人間たる所以の大きいなるもの他の一つは、知能である。私どもは、知能によって、数多くの幸せを手に入れたけれども、反面、有形無形の数多くの手ひどい災厄を被っている。知能は、人間の個人的側面を充たすだけの個人的資質にすぎないからである。人間は、社会的存在として一人では生きて行けない以上、人間として幸せに生きて行くためには、人間の社会的側面への自覚が必要であって、人間の個人的側面の充足だけでは不十分であることは、多言を要しない。このような人間の社会的側面を充たす社会的資質こそが、ボランテニアの心であろう。

ところで、このようなボランテニアの心は、実は人間と共に存在したのであり、人間の社会と共に存在したものである。何も、例えば先般の震災を契機に始まる

など、今に始まったものではない。そして、そのようなボランティアの心は、氣付かれなかった場合もあり、氣付かれても忘れ去られた場合もあり、氣付かれていてもあえて無視され否定され実践されなかった場合もある。国家、民族、時代、地域によつて、そのあり方は様々であつたであらう。もし私どもが氣付いていない場合には、早速氣付かなければならない。また、もし私どもが氣付いていても忘れ去つてしまつていた場合には、早速思い出さなければならぬ。さらに、もし私どもが氣付いていたけれども無視したり実践をしていない場合には、早速実践に取りかからなければならぬ。このようにして、ボランティアの心を核としたボランティア活動は、本来的に受身でありかつ社会の各層各面のすべてを充足することが不可能なものとして運命付けられている行政の隙間を、單に量的に穴埋めするだけでなく、質的に生命を以て躍動的に充足し、ひいては行政の質自体にもさらなる変革と向上を強いて行くものとなるであらう。

四、ロータリーとボランティア

ロータリー活動は、本来的にボランティア活動である。地域社会におけるサービス活動や国際社会におけるサービス活動がボランティア活動であることはいうまでもないし、職業上のサービス活動も、その有償性は別異の観点から肯定されているものであって、全体としてのそのボランティア活動としての性格を超えたり否定したりするものではないであろう。ロータリーの主要な標語 Service Above Self 自体、ボランティアの心と同じ系譜に属する同質のものであると思われる。かくて私どもは、ロータリーの「サービスの理念」がボランティアの心と原質を同じくし、そのロータリーの世界における表現にすぎないものであることに想到する次第である。

(一九九五年十二月)

ロータリーから見たローター・アクト・プログラム

一、はじめに

「ロータリーから見たローター・アクト・プログラム」というテーマは、「ロータリーは、ローター・アクトというロータリー自身のプログラムについてどのような期待を持ち、また、その現状や将来についてどのような意見を持っているのか」の謂であろう。尤も、「ロータリーは、ローター・アクトが実施しているプログラムをどのように受けとめているか」との謂と理解する余地もあるが、いずれにせよ、「ロータリーの世界にあって、ローター・アクトとは何か。その現状と将来はどのようなべきか」の点に集約されると考える。

二、国際ロータリー第二六六〇地区におけるローターアクトの活動の現状

国際ロータリー第二六六〇地区のローターアクトが、地区とゾーンのレベル及び各クラブのレベルで活発な活動を展開していることは、周知のとおりである。前者としては、地区年次大会、海外研修、献血運動、リーダーシップ・フォーラム、世界ローターアクト・デイのローターアクト・フェスティバル、地区連絡協議会、新旧理事役員会、ゾーン交流会、ゾーン会長会、他地区との合同運動会、ロータリーとのジョイント・パーティーなどがある。後者としては、各奉仕活動部門ごとに実に多彩多様な活動が展開されている。クラブ奉仕活動部門では、例会の充実、出席、会員増強、親睦などに向けての活動、各種記念行事、他クラブやロータリー・クラブとの交流例会、公開例会、IACとの交流、一泊研修、体験学習、キャンプなどの野外活動、スキーツアー、お茶会、テーブル・マナーの講習、美術鑑賞など。専門知識開発部門では、会員やロータリアンによる職業卓話、企業見学、職業紹介、適性チェック、伝統工芸体験など。社会奉仕活動部門では、チャリティイー・バザー、身体障害児招待イベント、地域社会行事への参加、

無料映画会、人形劇提供、手話講習、リングブル・古切手蒐集、クリーンハイ
ク、使用済みテレフォンカード・アルミ缶・牛乳パックなどの回収、リサイクル
の見学や勉強、老人ホームとの合同バザー、共同募金運動への協力、独居老人と
のふれ合いのための食事と記念品贈呈、地元清掃奉仕、障害児との合同ハイキン
グ、成人式記念撮影ボランティアなど。国際奉仕活動部門では、国際的な例会テ
ーマの設定、留学生対象の卓話、クイズ、交流会招待、対話と交歓、野外イベン
ト、外国語講座、海外RACとの交流・姉妹提携・文通の促進、留学生との関西
国際空港見学、世界料理の紹介と賞味など。これらがそれぞれ意欲的に取り上げ
られ、実施されている。

さて、いうまでもなく、ロータリーのローターアクト・プログラムは、一九六
八年に国際ロータリーによって設定され、アメリカのノースシャーロットRCが
同年三月にノースシャーロットRACを提唱したのが嚆矢であるから、すでに二
六年の歴史を閲しているし、わが国では同年六月に川越RCが国際商科大学RA
Cを、当地区では同年七月に大阪北RCが大阪北RACをそれぞれ提唱したのが

最初である。もちろん、ローターアクトは、青年男女にロータリー精神を鼓吹し、ロータリーの指導と後援のもとに奉仕活動を行うことを奨励し、その活動を通じて健全で指導的な市民として育成するためのプログラムである。そして、青年男女の知識や技能を高めてその個々の能力を開発し、物心両面に亘るニーズとの取り組みや親睦と奉仕活動を通じて、地域社会における良質な指導的な市民として存在を達成するとともに、国際社会における人々との良好な信頼関係を推進することが、ローターアクト・プログラムの目的であること、この目的のもとにさらに具体的な六つの目標が設定されていることも、周知のとおりである。このような意味において、当地区のローターアクトが精力的に実施している前述のプログラムや活動のすべてが、この目的と目標に沿った極めて適切かつ有意義なものということが評価できるわけである。

三、ローターアクトの存在意義

ところで、ローターアクトとはいったい何であろうか。私どもの人間社会にお

いて、ローターアクトにはどのような存在意義があるのだろうか。この問いは、結局において「ロータリーとはいったい何であろうか。私どもの人間社会において、ロータリーにはどのような存在意義があるのであるか」との間に帰着する。何故ならば、ロータリーは、現在社会の中核として職業活動を遂行している人達によって構成され運営されているが、その精神と活動の全部は、時の経過とともに、次代を担う世代の人達によって十分に継承され、さらに発展させて貰わなければならぬからである。ロータリーが青少年への奉仕活動の部門を設定し、次世代の人達との交流と育成に努めて将来社会への投資活動に注力し、そのことを奉仕活動の最も重要な課題として取り上げている所以である。従って、ロータリーとローターアクトとは、それぞれ独自の活動を予定された別個の社会的存在ではあるが、その精神と存在意義を等しくするものであり、ローターアクトの理解のためには、ロータリーの基本的な理解が不可欠であるとされる所以でもあるであろう。

いうまでもなく、ロータリー精神の核心は、「サーブス」Serviceの一点にある。ロータリーの存在目的は、その「綱領」Object of Rotary に掲げられている

が、その中核的な考え方が「サービスの理念」The Ideal of Service にあるからである。

周知のように、ロータリーは、一九〇五年にアメリカのシカゴの地において青年弁護士ポール・ハリスとその友人によって創設されたものであり、アメリカにおける欧米社会の社会感覚の中において形成され発展したものである。「人間は自己の責任において個人としての存在を全うすべきものはあるが、同時に自分一人では生きて行けない、社会の中でしか生きて行けない社会的存在でもある。人間が自己の生を全うするには、実に多種多量な欲求を充足させて行かねばならないが、それらは社会を形成する他人の職業上の努力や社会的活動の成果を利用することによって初めて可能となる。人間は社会的動物と称される所以である。従って、人間は、まず自分が携わる職業について最善の努力を尽くし、最も良質の成果を他人のため社会に提供して行くとともに、さらにこの努力を社会人として一般的な活動についても及ぼして行くという社会的な責務を負っている。これらの責務を厳しく自覚し、その自覚に基づいた行動を実行することを『サービス』

Service のこと、ロータリーはいの『サーブス』Service の理念の認識と実行を目的として結集された職業人の集団である」ということであろう。ただ、「個の確立を前提とした社会性の認識と実行という考え方は、社会の当事者は個人であり社会は個人によって構成されるものと明確に認識するいわば当事者意識を主潮とする欧米社会にあつては、むしろ日常の社会常識であり、特段の解説や理解のための努力は必要がないのかも知れない。ロータリーやそのプログラムとしてのローターアクトなどは、マクロな見地からは、欧米社会ではむしろ日常茶飯で日常生活の延長としての自然発生的なものであつたのかも知れないのである。

ところが、わが国では如何なものであろうか。わが国では、現在にいたるまで、近くは明治維新や第二次世界大戦など幾多の社会の変革があつた筈であるが、結局は現在においても、社会は個人と別に存在する巨大な存在で個人の意見や努力によつてさしたる影響を受けるものではなく、個人は社会に適応して上手に生きて行くことが幸せの前提であるという、いわば適応意識が主潮となつていようように見受けられる。「赤信号、皆で渡れば怖くない」という横ならびの社会である。

このような社会では、「サービス」Service という社会意識や価値観が存在しないかも知れないし、存在したとしても甚だ稀薄なものに過ぎないかも知れない。大正九年（一九二〇年）に米山梅吉という大先輩によって初めてロータリーがわが国に持ち込まれたときに、ロータリアンの先輩達は、「サービス」Service というロータリーの唯一最高の理念をどのように邦訳するか大変困られたと思われる。何故ならば、当時のわが国の社会には、「サービス」という観念がなかったからである。そこでやむなく大変ご苦心の末、これに「奉仕」という訳をあてられたのであろう。私どもが言いならわしている「奉仕の理念」である。ところが、残念ながら、「サービス」は「奉仕」とは相当違う観念であるかも知れない。何故ならば、「奉仕」は、むしろ無償の自己犠牲の行為であって、適応意識の社会においても十分存在しうるし、むしろそのような社会でこそ存在意義があるのかも知れないからである。「サービス」は「サービス」であって、「奉仕」ではない。そして、この食い違いは、現在のわが国社会の現状においても全く以前のままです、少しも変わっていないのではないであろうか。私どもは折角ロータリーに学

び、ローターアクトに学ぶのであるから、この根本的な違いをしっかりと見つめてみる必要がある。単なる「適応」から「自己責任」へと、子どもたちの社会意識や価値観をしっかりとみつめ直してみる必要があるかと思うのである。わが国の社会にロータリーが存在し、さらにその先行投資としてのローターアクトが存在する意義は、正にこの点にあるかと思うのである。

四、ローターアクトの将来的展望

ただ、東西冷戦構造の解消を契機として、従来の欧米主導の文化や文明に対する本格的な批判と省察が徐々に開始されようとしているように見受けられる。子どもが現在享受している数々の生活上の利便や快適さは、欧米的資質の開発によるものであるが、反面、科学と技術にその大半を支配されている子ども人間社会と、その中であって子どもが現在被っている堪え難い心的物的な障害もまた、欧米的資質に由来するものであることが覚知され指摘され始めているからである。従って、「個」を絶対としてその前提に立つて社会性を構築しようとする従来の

欧米社会の社会意識や価値観にも抜本的検討が必要であろうし、反面、わが国などのように殆ど適応に終始してそこから一步も出ようとしない考え方にも根本的な省察が必要であろう。現在社会は、このような意識と価値のあり方をめぐって目下深刻な混迷のただ中であろうと思うが、ローター・プログラムは、彼らを提唱したロータリーと語り合い手を組み合い、私も自他と社会の幸せのために、将来に向けて正しい努力の方途を発見し実行して行かなければならないと思う。そうすれば、ローター・プログラムが展開しているプログラムと活動も、一段の存在感と光輝を増すものと確信してやまないものである。

(一九九四年六月)

世界ローターアクト週間に因んで

一、ローターアクトの目的と目標

周知のとおり、ローターアクトは、青年男女に、その個々の能力の開発に役立つ知識や技能を高め、地域社会の物質的社会的なニーズと取り組み、親睦と奉仕活動を通じて、世界の人々との間によりよい信頼関係を推進するための機会を提供することを目的とし、さらに、専門技術と指導能力を開発し、個人の価値と他人の権利を尊重する観念を養い、職業の品位と価値を認識し、道徳的基準の重要性の認識、実践、推進をはかり、地域社会と世界各地のニーズ、問題、機会にかかる知識と理解を深め、地域社会に奉仕し、また国際理解と人類への善意を推進するための活動の機会を提供することを目標として、年齢一八歳から三〇歳までの青年男女を対象に実施されているロータリーのプログラムである。地域社会の

青年男女を、指導力と責任感に溢れ、職業にかかる高い道徳的水準と豊かな国際感覚に恵まれた次代を担うよい市民として育成して行こうとするもので、ローターが推進する数多くのプログラムの中でも、将来社会への投資として極めて意義深い重要なものといふべきであろう。ローターアクト・クラブは、スポンサークラブとなったロータリー・クラブの提唱で創立され、その指導と協力のもとに活動し、その名称も Rotary と Action が組合されて名付けられたものであることは、いうまでもない。

二、ローターアクトの沿革と現状

最初のローターアクト・クラブは、一九六八年三月一三日に米国ノースカロライナ州のノースシャーロット・ロータリー・クラブが提唱したノースシャーロット・ローターアクト・クラブである。最新の資料によると、世界では一一〇の国に六、六三四のローターアクト・クラブが存在して一五二、五八二名のローターアクトが活躍している。因みに、わが国には四五六のクラブと六、九〇七名の

アクターが、また当第二六六〇地区では二二のクラブと四一五名のアクターが活躍中である。

三、「世界ローターアクトの日」と「世界ローターアクト週間」

一九九二年のR I理事会は、最初のローターアクト・クラブであるノースシャーロット・クラブが創立された日を記念して、毎年三月一三日を「世界ローターアクトの日」と定めたが、翌一九九三年のR I理事会は、ローターアクト・クラブ創立二五周年を記念して、毎年三月一三日を含む一週間を「世界ローターアクト週間」と定めた。この週間に、ローターアクトとロータリアンとがこぞつてローターアクトを祝い、また、ローターアクト・クラブがロータリー・クラブと手を携えて共同の祝賀行事を実施し、ローターアクトやロータリアンはもちろん、地域社会の人々がローターアクトへの認識を深め、その活動を活性化することが要請されている。

一九九四―九五年度の世界ローターアクト週間は、一九九四年三月七日から三

月一三日までの一週間であるが、この一週間に、(1)ローターアクト・ポストカードをローターアクト・クラブを提唱していないロータリー・クラブに送ること(2)ローターアクト・クラブがロータリアンを招待すること(3)スポンサー・ロータリー・クラブがローターアクトを招待すること(4)地域社会におけるローターアクトへの認識を高めるためにローターアクト・クラブとロータリー・クラブが共同でプロジェクトを計画して実施することの四つの活動を完了したローターアクト・クラブとそのスポンサーであるロータリー・クラブは、所定の書式で一九九四年四月一日までに申請することにより、RIから表彰を受け、ローターアクト記念のバナーを授与されることとなっている。

四、国際ロータリー第二六六〇地区における世界ローターアクト週間の行事

因みに、当二六六〇地区では、週間祝賀行事として、一九九二―九三年度には中之島公園で一般市民を交えてチャリティー・ウォークを実施し、一九九三―九四年度には一般市民とともに枚岡神社から生駒山へ登山するチャリティー・ウォ

ークを実施している。また、世界の各地では、一九九二―一九三年度に五〇の国において色々な祝賀行事が行われ、一九九三―一九四年度にも数多くの多彩なプログラムが実施されている。例えば、オーストラリア、日本（二七〇〇地区）、ギリシャ、英国、アルゼンチン、ガーナ、インドなどのローターアクト・クラブが、湾岸チャリティー一周遊覧、宝くじの夕べ、エイズ・プログラム、孤児院訪問、クイズの夕べ、公共公園の建設、心づくしのペンキ塗り作戦、免疫付与活動、アート展示会、身障者のためのハンディ・キャンプ⁹³、天然雨林散策などの行事を盛大かつ成功裡に実施した事例などが報告されている。

私どもは、世界ローターアクト週間を迎えるにあたり、健全で有為な次代の若者を育成するために注力するロータリーのローターアクト活動の意義を再認識し、その強化と充実のために一層の努力を払いたいと思うものである。

（一九九四年十二月）

ローターアクトの年次大会に想う

このたび、先般一月一七日未明の阪神・淡路大震災にあたり、国際ロータリー第二六六〇地区のローターアクトは、地区レベル、ゾーンレベル、クラブレベルの活動計画に基づき、直ちに被災地に赴き、爾後今日にいたるまで四カ月に及ぶ長期間にわたり、救援物資の仕分けや運搬、被災に伴う後片付けや引越しの手伝い、食事の炊出しや配布、救援給水、入浴サービス、避難所の宿直、ペット動物の救済、被災児のためのボーリング大会やエア・トランポリン大会の開催、被災者の心のケアのためのチラシの配布やポスターの掲示、義援金の募金や送付など、各方面にわたる献身的なボランティア活動を強力に実行して継続し、被災者一同に多大の感銘を与えたとともに、地区内外にローターアクトの存在意義を深く印象付けた。その善意に溢れた行動力とその社会的成果に対し、先般のロータ

リーの地区大会においてガバナーから深甚な敬意と謝意を受けたのも、むべなるかなと言ふべきであらう。

さて、現下のわが国は、政治経済その他社会の全般にわたり、理念の欠如と、これに伴う社会意識や価値観の果てしのない混乱やあてのない模索に明け暮れ、事態は日と共に益々混迷の度を深めているように思われる。このような事態を招いた遠因は、明治初年以來の急激な欧米の文明への追従を一途とした科学技術偏重の教育によって、私どもの資質にもたらされたその跛行的な開発と形成にある。次いで、第二次世界大戦終戦後の半世紀に及ぶ長期間、殆ど対米依存の経済活動に終始して、わが国独自の本格的な理念の自覚と形成を怠ったまま冷戦構造の解消を迎えたことが、その当面の原因であらうかと思われる。

しかしながら、さらに慎重な検討を深めて行くと、私どもがかつて全面的に追従し、今なお追従をやめることをえない欧米の文明自体にその真因があるのではないかとの疑念が生じて来る。何故ならば、欧米の文明を生み出した欧米的な資質は、人間の科学的資質の開発とその成果の享受には意欲的でありかつ効果的で

あるが、当該開発に伴う各種の負の側面への手当てや解決はもちろん、人間存在の非科学的資質に立脚した理念の形成などには、本来的に不得手であり消極的ではないかと思われる節があるからである。現に、社会意識と価値観のかつてない混迷と変革を迎えているのは、わが国社会に限った現象ではなく国際社会全般についてであるし、欧米主導の社会活動を主たる素因として、社会環境と自然環境の全面にわたって致命的な障害が生じている現状に徴しても、そのような疑念を益々深くするものである。

ところで、このような私ども人間社会の混迷を救うものは、ロータリーの「サービスの理念」[The Ideal of Service]を措いて他にはない。ロータリーの「サービスの理念」は、私どもの人間性の真の実現を意図するものであるからである。換言するならば、人間の個性と社会性の真のあり方を自覚し、この自覚に基づいた正しい社会的活動によって、私ども個人から地域社会を経て国際社会にいたるまで、その存在意義を豊かにし、かつ高めて行こうとするのが、ロータリーの「サービスの理念」であり、このことこそが、「サービスの理念」が人間社会永遠の

理念であると称せられる所以であろう。

ローターアクターは、私どもロータリアンのすぐ後を生きて来る人達である。彼等の新しい眼で、彼等自身を、周囲の地域社会を、そして国際社会を眺めさせなければならぬ。そして、彼等の新しい手で、彼等の新しい家庭に、新しい職場に、新しい仕事に、新しい人間関係に、総じて新しい社会の器の中に、古くて新しく時と共に変ることのない人間社会の真理であるロータリーのサービスの理念を、しっかりと盛り込ませなければならぬ。人間の存在を直視する理解と活動によって、この混迷と模索に明け暮れる只今の社会を、相互の理解と幸せに充ち溢れた平和な社会とさせねばならない。そして、正にこのことこそが本年度のローターアクトのターゲットが Power of PAC である所以であり、それが『なぜ?』からの挑戦」と解せられる所以であろう。そして、今回の年次大会のテーマに謳い上げられているように、大会を機として、彼等が一斉に手に手をとって、私どもの社会にとって大切なこの作業に、しっかりと着手して貰いたいと期待する次第である。

(一九九五年五月)

青少年への奉仕活動

一、はじめに

周知のように、一九六二年に発足したインター・アクト・クラブのために一九六四年にインター・アクト週間が設定され、この週間が五年後に青少年活動週間となり、一九八三―八四年から毎年九月が青少年活動月間となっている。この月間では、「各ロータリアンは青少年の模範」Every Rotarian : an Example to Youthという標語を掲げ、ロータリアンが提唱するすべての青少年活動に焦点をあてるための月間とされていることは、いうまでもない。

ロータリーは、一九〇五年の創設以来、青少年のためには深い関心を示し、色々な活動に携わって来ていた。そこで、一九二三年のセントルイスの国際大会に、青少年奉仕の目的を身体障害児の福祉に限定しようとか、学生に対する学費

貸与を優先させようといった決議案が提出されたが、すべて否決され、その後の R I 理事会で、青少年のためのプログラムは各クラブの自主的な選択と決定に任せようという方針が決定され、このことが原動力となつて、ロータリーの各奉仕活動の中に、実に多種多様な青少年のための活動プログラムが計画され実行され、青少年への奉仕活動が充実し発展して来ることとなつたのである。現在、当地区においても、地区レベルや各クラブのレベルで、数多くの多彩なプログラムが展開されていることは、周知のとおりである。

二、青少年への奉仕活動の現状

そこで、このような活動を督見して見ると、まず、青少年への奉仕の固有の分野では、「青少年指導者養成プログラム」Rotary Youth Leadership Award 略して「ライラ」RYLA や、「インターアクト・クラブ」Interact Clubs 略して IAC などがある。前者は、青少年達のために、その資質を開発し、地域への関心を深めさせ、将来善良で健全な市民として成長して行くことを願つてロータリーが開催

するセミナー方式やキャンプ方式の活動で、当地区では、毎年九月の山のRYLAが能勢の大阪府立総合青少年野外活動センターで、毎年五月の海のRYLAが淡輪の大阪府立青少年海洋センターで、いずれも百名以上の青少年と多数のロータリアンの参加をえて、それぞれ二泊三日のスケジュールで盛大に開催されている。また、毎年八月には、小学校高学年の児童を対象として、能勢の野外活動センターで二泊三日の少年少女のニコニコ・キャンプも開催されている。インター・クラブは、一四歳から一八歳までの高校生の青少年を対象として、子供達の資質や人間性を大切に育て、地域社会や国際社会への理解を深めて責任を果す態度を養うことを目的とするクラブ制の活動で、当地区には目下九つのクラブが活発に活動をしている。

また、他の奉仕部門にも、実質上、青少年のための奉仕活動は数多く存在している。例えば、職業奉仕部門では、職業にかかる相談、情報、指導、表彰や失業問題などがある。社会奉仕部門では、障害児福祉、非行や薬物濫用防止、青少年に対するレクリエーションや市民教育プログラムなどがあるし、「ローターアク

ト・クラブ」Rotaract Clubs 略して RAC は、實質上青少年のための活動である。当地区では、昨年三つのクラブが拡大され、合計二二のローターアクト・クラブが活発に活動中である。国際奉仕部門では、「国際青少年交換」International Youth Exchange が大変重要であるし、ロータリー財団の「国際親善奨学生」、「研究グループ交換」Group Study Exchange 略して、GSE、米山記念奨学会の奨学生、三Hプログラム、ポリオ・プラスなども、實質上青少年のための活動である。

三、青少年への奉仕活動の二つの側面

ロータリーの青少年への奉仕活動には、二つの側面があろう。その一は、社会的弱者の域にある青少年へ支援を提供する青少年福祉の側面である。その二は、ロータリーの継承者たる善良で健全な次代の社会人を育成して行こうとする側面である。前者はいわば高齢者福祉とともに、ロータリーの地域的な或いは国際的な社会奉仕活動の重要な一環であろう。その領域には、三Hプログラム、ポリ

オ・プラス、障害児福祉、非行や薬物濫用防止など数多くの課題が存在している。後者は、善良で健全な次代の社会人を育成するという視点では、地域的な或いは国際的な社会奉仕活動の一環でもあろうが、同時にロータリーにとって、ロータリー活動自体の継承者を育成し、その活動の継続性を確保し強化しようとする投資活動としての側面を持つものでもある。その領域では、自己責任と職業についての基本的理解から「サービスの理念」の原質的自覚を促し、これを地域社会から国際社会にいたる人間社会にかかる視点と価値観の確立に及ぼすとともに、その具体的実践を体験させる等の作業が策定されることとなろう。

ただ、私どもは、このような二つの側面が実は根深いところでその条件と素因を共通にしていることに気付くのである。東西冷戦構造の解消に伴い、私どもは、人間社会の現実をありのままに直視せざるをえない現況に立ち至っているが、私どもの前に露呈されている社会とは、欧米主導の人間絶対と個人絶対の意識と価値を前提とし、科学と経済を万能とする文明の集積をその大半とするものである。私どもは、その成果として相応の快適性を手にすることはできたが、これと

引換えに、果てしのない恐るべき人間の技能資質の開発と、これに伴う自然界と人間社会の両面にわたる重大な環境上の障害の進行に直面している。さらに、わが国社会に限定して考察を加えても、適応社会の産物である欧米追隨の近代教育の管理化は、教育の産業化を介して社会の全面的管理化の進行を促進し、この悪循環は、健全な社会意識や価値観の稀薄化と混迷を招来してとどまるところなく、その解決は著しく困難な状況に立ち至っているものようである。そして、このような地域社会や国際社会の混迷した環境の中で、真の青少年福祉や次代を担う青少年の育成などが、果して実現可能であるのかどうか、甚だ危ぶまれる状況にあらうかと思われる。

四、青少年活動をめぐるロータリアンの課題

しかしながら、ロータリアンは、青少年活動を通じて現実の青少年と接触し、行動を共にすることにより、彼らが当面している新しい問題に接し、現在の地域社会や国際社会が将来に向かって抱えている課題を的確に理解することができ、

人間社会に対する柔軟な考え方をとり続けることができるものと思われる。したがって、現在のような変化と混迷の時代にあつてこそ、青少年との接触を深め、語り合い、行動を共にして、彼らを理解することに努め、青少年への奉仕活動の充実ははかつて行くことが、私どもロータリアンに要請されている最も重要な課題であると考える次第である。

(一九九四年九月)



青少年活動をめぐって

一、はじめに—青少年活動月間

周知のように、まず一九六八年のR I理事会の決定で毎年一〇月一五日を含む一週間(当初は五日から一日までの一週間)が青少年活動週間と定められ、次いで同週間が一九七八年のR I理事会の決定で毎年九月一五日を含む一週間と変更され、さらに一九八二年のR I理事会の決定で週間が月間とされた結果、現在のように毎年九月が青少年活動月間となっている。この月間では、「各ロータリーアンは青少年の模範」という標語 Slogan—Every Rotarian : an Example to Youth を掲げ、ロータリーが提唱するすべての青少年活動に焦点をあてるための月間とされていることは、いうまでもない。

二、青少年への奉仕の目標

青少年への奉仕の目標は、国際ロータリーの理事会の方針によって詳細に定められているが、要約すれば、ロータリー・クラブとロータリアンに、青少年の間形成に影響を与える条件を理解することの必要性和、青少年の健康、教育、精神的資質や、職業につくための準備の重要性を強調するとともに、青少年の心に善良で健全な市民意識を育て、世界への関心を高めさせ、青少年にロータリアンや違った国の青少年との接触をふやすよう努めさせることとされている。

国際ロータリーは、かねてより理想と情熱と可能性に富む青少年の問題の重要性を認識し、一九二三年のセントルイスにおける国際大会を契機として、青少年に自己決定の自覚とその結果に対する責任を持たせることにより、青少年を地域社会の善良で健全な市民に育て上げることが青少年のための活動を支える基本方針として、長い時間をかけ、あらゆる奉仕部門にわたって、多様なプログラムや活動を発展させ定着させて来た。世界各地の小さな子供達に、健康で恵まれた人生のスタートを切らせるための活動はもちろん、さらに成長した青少年達には、

機会と課題を与え高い倫理観を奨励することによって、幸福で健全な市民となるための援助をする活動である。

三、青少年のための活動の状況

そこで、ロータリーにおけるこのように多様多彩な青少年のための活動を各奉仕部門ごとに瞥見してみると、まず、青少年への奉仕の固有の分野においては、「青少年指導者養成プログラム」Rotary Youth Leadership Award（略してRYLA）、「インターアクト・クラブ」Interact Clubs（略してIAC）、「青少年障害者」Youth Disabilities、障害青少年の国際親善のための「ハンディ・キャンプ」などのプログラムを用意するとともに、家族の日を設けるなど青少年と両親との間に有益な関係を増進する活動、青少年に影響を及ぼす地域の状況を調査し、学校、裁判所、仮出獄事務所を取り扱う事務所、ボーイ・スカウト、青少年クラブ、野営場、運動場などの団体や施設に協力する活動、青少年の声を聴く会や青少年への奉仕大会などを開催し、青少年の後援者となったり、学費貸与資金または奨学金

を設けるなどの活動や、それぞれの地域に適した青少年への奉仕のための特別プログラム、青少年非行への対応をはかるプログラムなどを奨励している。

次に、職業奉仕の分野においては、職業相談、職業指導、職業情報、職業活動表彰などのクラブとしての職業奉仕活動や、失業問題への対応も、青少年にとつて極めて有意義である。また、社会奉仕の分野においては、障害児福祉その他一般の児童福祉をはじめ、薬物濫用防止や犯罪防止などの領域における問題を軽減し解決するプログラム、レクリエーションや市民教育に関するプログラムなどを用意しているが、これらは、青少年を対象とした場合、特に有用で有効なものとなるであろうし、「ローターアクト・クラブ」Rotaract Clubs (略してRAC) は、実質上、青少年のための活動である。国際奉仕の分野においては、「国際青少年交換」International Youth Exchange や「ロータリー国際職業人交換」Rotary Overseas Vocational Exchange (略してROVE) などのプログラムがあるし、海外の姉妹クラブや友好クラブとの交流のなかで行われる学生や青少年の交換なども、極めて効果的なプログラムであろう。ロータリー財団の「国際親善奨学生」、

「研究グループ交換」Group Study Exchange (略してGSE)、三Hプログラム、ポリオ・プラスや、米山記念奨学会の奨学生などのプログラムも、実質上は青年のための活動であろう。

四、国際ロータリー第二六六〇地区における青少年への奉仕活動

国際ロータリー第二六六〇地区においては、青少年への奉仕の固有の分野における活動として、かねてから秋の山のRYLAと春の海のRYLAなどのキャンプ方式のRYLAが、累年多数の青少年やロータリアンの参加のもとに盛大に開催されて定着しているし、少年少女のニコニコ・キャンプや、九つのインターアクト・クラブが活発な活動を展開している。また、他の奉仕部門における実質的な青少年活動としては、三つの新クラブ創立により合計二二を数えることとなったローターアクト・クラブが活発な活動を展開しているし、長短期の派遣と受け入れを含む数多くの国際青少年交換、派遣と受け入れを含む充実した研究グループ交換、全国的にも上位を占めるロータリー財団の国際親善奨学生や米山記念奨学

会の奨学生への支援活動、障害児等とロータリアンとの仲よし運動会などが行われているほか、地区内大多数のクラブが、青少年による野球、ソフトボール、サッカー、卓球、剣道、柔道、ジョギングなどのスポーツ大会、凧揚げ大会、障害児のスポーツ大会、ハイキング、バード・リスニングその他の青少年の野外活動、音楽祭、コンサート、青少年の声を聴く会、ボランティア・グループ、IAC、RACの会員などとの対話の会の開催や共同奉仕の実施、少年少女合唱団の育成、青少年による田植作業、国内友好クラブとの学生交換や児童画の交換、シンナー、覚醒剤、麻薬などの薬物濫用や青少年非行の防止のための市民大会や街頭キャンペーンなどの企画の実施、非行少年のための施設の訪問、ボランティア・グループや母子家庭への激励や里親制度への援助と協力、身障児親子キャンプへの参加、障害児のためのクリスマス会の開催、勤労学生、交通遺児その他の青少年のための各種基金や奨学金の創設と運用、優良青少年、勤労学生、青少年のための奉仕活動実践者などの表彰、肢体不自由児や心身障害児のための施設、養護施設、目や耳の不自由な青少年のための施設、保育所、子供文化センター、

子供文化協会、少年文化館、子供会、少年将棋大会、成人の日記念の集いなどの施設や催し、青少年非行防止の運動などへの援助と協力、キャンプ設備の貸与、キャンプ・リーダー・コース終了者への青年功績賞の授与、エイズ問題のクラブ内の検討など、多彩な活動が企画され展開されていることは、まことに慶ばしい限りである。

五、青少年のための活動の将来的意義

青少年のための活動は、いわば一つの側面を持つものであるといえるであろう。幼児、児童、そして成長した青少年達が、社会の一員として健康で幸福な生活を送るための条件を整備し確保するための活動としての側面と、私ども自他の幸せとよりよい社会を実現するために、青少年達が、個人と社会と世界についてしっかりした認識と価値観を持って成長し、私どもロータリアンが現在全力をあげて注力している只今のロータリー活動を次代を担う世代として立派に継承し発展させて行くことを確実にするために、私どもロータリアンが現在行わなければなら

ない活動としての側面である。前者はいわば広い意味における社会奉仕活動であろうが、後者はロータリーとロータリアン自体の未来への最大の社会的な投資活動である。いずれにせよ、青少年のための活動においては、「青少年に対して」活動するだけでなく、「青少年とともに」活動することを手法の基本としなければならぬとされていることは、周知のとおりであるが、実は、ロータリーのサービス活動のすべてが、「サービスの相手とともに」行うべき本質を本来的に帯有しているものであり、青少年のための活動の場合には、その性格が特に顕著に要求されるのではないかとも思うのである。

(一九九三年六月)

米山記念奨学会活動をめぐる若干の問題について

一、はじめに

わが国ロータリーの米山記念奨学会活動は、日本が世界に誇る国際貢献の一つである。わが国最大の民間奨学財団として、アジアを中心とする留学生の支援活動に果して来たその実績が世界的に抜群の高い評価を受けていることは、周知のとおりである。私どもは、今後ともこの貴重な奨学会活動を継続し、さらにその充実と発展に努めて行かねばならないことはいうまでもない。

ところで、人間社会の国際化は、世界の現状に照らし、歴史的に必然な最終確定の潮流となっている。教育は、このような社会の国際化を進めて行く上で最も重要な作業であるから、教育自体の国際化は、私どもが均しく取り組むべき喫緊の課題といふべきであろう。しかも、そのような教育の国際化において、例えば、

科学技術はその性格が人類の共通思考を前提とする関係からその学習と移転が民族間の個性差などをさほど障害とせず比較的容易であるのに比して、精神的な資質や文化は民族の個性を前提とする関係からその相互理解と伝達は極めて困難な作業であり、今後とも幾多の曲折が予想される。

二、米山記念奨学会の課題

米山記念奨学会は、その創設当時においては、米山梅吉翁のアジアからの留学生を支援する遺志を記念するものであったために、その事業もその目的に沿う内容のものとして企画され実施されて今日にいたったのであるけれども、国際情勢が大きく変化した今日においては、すでにその目的と内容において大きく変容が予定され、その存在意義も、人間社会の国際化とその基礎作業としての教育の国際化へ向けてのわが国ロータリーの国際奉仕活動の一環に移行すべきものとされて来ているのではないかと思われる。このような観点から見ると、今日の米山記念奨学会は、以下のような幾多の課題を負っているとわねばならない。

先ず、海外から留学している奨学生に提供しているわが国の教育の質自体の問題がある。わが国の教育は、明治初年における欧米文化追隨の系譜から、現今にいたるも依然として科学技術を主潮とする跋行的性格を色濃く継続して帶有しているし、さらに、第二次世界大戦後の五十年という半世紀に及ぶ長年月の経過を一貫して対米依存の経済活動に終始し、独自の理念を指標とする個性と社会性に裏付けられた自らの精神文化の創造と形成を目指す側面を確立するにいたっていない。その当然の結果として、私どもは、冷戦構造が解消して社会全般の各方面において社会の質の変化を強いられつつある今日、徒らにあてのない摸索と甚しい混乱に明け暮れ、そこから脱却する方途を発見するどころか、事態はさらなる混乱の度を日一日と深めている。教育の実情も正にこのような状況の例外でなく、むしろ問題の認識と提起すら行われていない現状にあり、確実な客観性に裏付けられた個性豊かな精神的資質を形成し集積して、真の国際化を目指す余裕など、些かも存在しない現状にある。

ところで、いうまでもなく、教育は人間社会の原質自体を形成する人間の社会

活動であるから、現在の社会を構成しさらに次代の社会を形成して行く上で、殆ど決定的な要素としての価値を保有するものである。海外から留学している奨学生にわが国における教育の成果を提供することを支援する活動の真の意義も、本来は正にその点にあるわけであるし、それだけに、私どもは、彼等に提供されているわが国の教育のあり方に重大な関心と懸念を持つものである。万が一にもその現状に不備不整が存する場合には、私どもとしては、その是正や補完のために、何らかの適切な方途を別途策定して、これを彼等に併せ提供すべき責務を負っているのではないかと考えられるからである。

次に、教育の国際化にあたり真に必要な課題は、科学技術の学習と移転よりは、むしろ世界各国各民族の精神的資質や文化の相互理解と伝達であろう。このような観点からすると、従来の奨学生の学習の対象は、どちらかといえば自然科学や技術の面に偏っていた嫌いがあり、その重点を精神文化の面に移す必要があると考えられる。また、教育の国際化によりの確に対応するためには、幾多の困難はあっても、奨学生選抜の範囲が韓国や台湾に偏っていた現状を早急に是正して、

世界各地から万遍なくバランスよく奨学生を採用するように努力すべきであろう。

さらに、奨学生の選抜方法も、在日留學生に限って行って来た従来方式だけでなく、幾多の障害が予想されてもこれを克服して、現地選抜その他の方式を早急に併せて検討し、各国各民族を代表する優秀な人材を確保するように努めるべきであろう。

最後に、奨學生に対する支援活動も、単なる経済的支援だけでなく、精神的な或いは社会的な環境にかかる情報の提供など、現在の世話クラブやカウンセラーの制度よりさらに明確で効果的な別異の方式も併せて考案されなければならないであろう。また、奨学会としての支援活動も、奨學生に対する個人的支援だけでなくとどまらず、例えば外国大学における講座の開設や講師の派遣、開発途上国における各種教育施設の建設や人員の派遣など、教育全般のハードとソフトの両面にわたって、もっと多様で柔軟な国際貢献の方式が検討されてもよい時期になっているのではないかと思われる。

三、米山記念奨学会の使命

いずれにせよ、社会の国際化は現今の人間社会が抱える最大最終の課題であり、ロータリーが目指す真の国際理解と平和も、これによってのみ実現されるものと思われる。従って、その基礎作業である教育の国際化は、ロータリーにとっても最重要課題の一つであろう。私どもが米山記念奨学会活動の意義を再認識し、その新しい発展と充実のために注力すべきであると考える所以である。

(一九九五年四月)

米山奨学生を送る

地区米山記念奨学部門担当バスト・ガバナーとして

奨学生の諸君が、それぞれの学業の過程を、予定どおりに、かつ立派な成果を以て終了されたことに、心からお慶びを申し上げる。

ところで、諸君が留学の数年間を日本で過ごした時期は、日本が第二次世界大戦後経済発展一辺倒に半世紀に垂んとする期間を過ごした挙句、見事にその挫折に直面した時期であった。その結果、従来の一國繁栄主義にはもはや如何ともし難い限界が存在することを否応なく思い知らされて逃げ場のない反省に迫られると同時に、その反面で、むしろ固有の精神文化の貴重な価値に新たな見直しを求められて来た時期でもあった。総じて、人間社会の存在意義への根本的な問い直しと模索に手が着けられた時期であった。このような意味では、諸君は、本来の学業以外に、これに優るとも劣らない貴重な国際的な社会経験を具体的に学習す

る機会に、通常の時期以上に恵まれたこととなる。米山記念奨学会は、諸君がそのような幅広い豊かな留学の成果を身に付けるまで、多少なりともお手伝いをして役立つことができたことを、嬉しく思いまた誇りに思うものである。

諸君のうちには、早速帰国される者もあり、また当分引続き日本に残る者もある。いずれにせよ私は、諸君に三つのことをお願いしたいと思う。まず、米山記念奨学会とこれを支えるロータリーの存在とその果して来た実績を十分にかつ深く理解していただき、今後も引続き学友として奨学会と緊密な関係を維持していただきたい。次に、自国の精神文化の個性を、自画自賛ではなく、国際的な視点に立って見直しをして、その真の価値の認識を深めていただきたい。さらに、諸君が修得した学識と技能とを、単に自国のためだけでなく、隣の国々や世界の多くの国々の人達のために役立てるよう、国際的視野に立って活用し、発展させるよう心掛けていただきたい。

終りに、諸君の課程の終了にあたり、諸君の将来に国際社会への夢を託してお祝いのことばとしたい。

(一九九六年二月)

不況雜感

一、はじめに

近年におけるわが国の不況は、平成不況と命名され、わが国の歴史に類例をみない未曾有の構造不況と評されている。問題は、その構造的要因が何であるかということであろうし、その内容を理解するにあたっては、この不況に先立つ好況の要因が何であったのかという問題の理解が不可欠であろう。

二、第二次世界大戦後における経済発展の要因

第二次世界大戦後においてわが国が遂げた経済的発展は、全世界の人々から、正に歴史の奇蹟と称せられた。そしてその要因は、状況が一応鎮静した現在において冷静に経緯を考察してみるのに、結局において、社会的諸活動を全般的に良

好に管理しうる資質と、勤勉さに価値を置く倫理観の二つであつて、私どもがたまたまその双方を同時に保有していた点に帰着するものと思われる。

前者は、科学的素因を主潮とする欧米文明の急激な組織的な学習を意図してその結論的部分である技術的知識と実技を重点的に的確に修得した明治以来の近代教育の成果の蓄積であつて、行政をはじめとする社会の組織的管理や、企業をはじめとする物資の生産流通消費にかかる経済活動の管理はもちろん、法制度、教育、学術、医療、福祉、諸文化などの一般的な社会活動全般にわたる効率的な管理にその力を發揮した。また後者は、個人の生存とその幸せを周囲の社会への適応に位置付ける価値観の定着の成果であつて、わが国のあらゆる社会活動全般にわたつてその継続的發展を支える心の要因となつた。

このような二つの要因が、敗戦によりわが国が陥つた生存の根底を問われる危機的な状況からの脱却をはかるため、一挙に無限定に開花し発現した成果こそが、戦後わが国が果した奇蹟的な経済發展であつたといえよう。したがつて、その要因は、人間の基本的な資質とか資源やエネルギーなどの物資の存在という原質的

な要因ではなく、むしろ、事務や技術による処理とかある種の社会慣行といった管理的要因がその主たる要素であったといえよう。全世界の人々は、歴史にかつてないわが国の爆発的な経済発展の成果にまずは仰天し、次いでとりあえず賞讃し、やがて徐々に困惑し、最後に次第に批判を深めつつ現在にいたっていることは、周知のとおりである。働きすぎであるとか、不公正であるとか、人間性を無視しているなどの倫理的な批判が、その主な内容であろう。私どもの活動とその成果のメカニズムの実態が、漸く人々の目に明らかとなつて来たからに他ならない。

三、平成不況の分析

かくて今、円高その他の変動要因の自律的反応だけでなく、世界的規模において、私どもの国際的な経済活動に一定の制約を設けることが対策として論ぜられるとともに、それぞれの相手国において、わが国が保有している高度の管理的資質の学習と修得をはじめとする企業の防衛と強化に向けての努力が着実に実施さ

れ、さらに、わが国社会自体における適応意識から当事者意識への社会意識の变革が、勤勉さというわが国特異の社会慣行のあり方についての確に減殺的效果を及ぼしつつある結果、その当然の結果として、従来わが国が保有してきた管理的資質を中核とする先進的成果は、急速にその競争活力を失いつつある。しかも、問題は、それだけではない。当初、韓国や台湾が逸速くわが国の経済発展の跡を追って一定の成果をあげたが、さらに近年にいたっては、中国や東南アジアの諸国が豊富な資源や労働力を原資とする格段の競争活力をわが国と同一のまたは類似の手法に盛って、わが国を上廻る経済発展の成果を獲得しようとして一斉にわが国を追跡し始めている。しかも、わが国企業の生産拠点のこれらの国々への転出は、生産をはじめとする経済の空洞化はいうに及ばず、技術をはじめとする各種管理資質の移転に益々拍車をかけているといえよう。

したがって、わが国近年の不況の真因は、単にいわゆるバブル経済の崩壊に伴うものと単純に受け止めるべきものではない。もちろん、まず放漫な金融緩和政策の継続と土地や株式への無秩序な投機志向の放置やこれらに伴う経営感覚の混

乱にその大きな誘因があり、次いで、その対策として打ち出された危険極まりない金融引き締め政策の安易な実施と表面的で無定見な税制その他の行政規制の濫用がその引き金となったことは否定できない。しかしながら、冷静に事態の推移を眺めるならば、本来戦後わが国経済の驚異的發展を国内的にまた国際的に支えた要因なり条件の大半は、すでに前述のとおり徐々に活力を失い消失し去つてきていたのであつて、このような要因なり条件の根本的變化がわが国経済の推移の基底に大きく横たわつていたことが、今日の不況の本態的原因であるといわれなければならぬ。わが国経済は、本来徐々に時間をかけて好況から不況へと移行する状況にあつたものが、バブル経済の發現とその崩壊によつて、急速で劇的な移行を結果し、かつその不況の傷を深くし回復を困難とさせているにすぎないといふべきであらう。戦後私どもが営々として築き上げた経済發展の成果は、引続き必然的に予定された今日の不況への対策のための貴重な原資たるべきものであつたものを、徒らに無定見な投機的使用に徒費し去つただけでなく、その不況を質量共に悪化させるという逆効果までもたらしているといふべきであつて、私ど

もの将来のため正に悔やんでも余りある痛恨の過誤であったというほかはない。私もはたとえ心痛む失敗であったとしても、徒らに目を覆うことなく、事態を正しく検討し認識することによって、将来における真の発展への資とする心構えを持たなければならぬ。

四、今後における対応とロータリー

いうまでもなく、国家など一定規模の地域社会の経済の状況は、資金、雇用、情報、生産物流消費の形態、教育、行政の対応、社会管理の組織、為替相場などの経過的な媒介的な素因によって短期の一時的な変動を見ることはあっても、終局的には、当該社会を構成する人間自体の人的な資質と当該社会自体で調達可能な資源エネルギーなどの物的資質との二つを基本的な条件として、その総合的な効果によって長期的に決定されるものであろう。このような視点からわが国の経済の現状を解析すると、まず、経過的な媒介的な素因については、方向性のない不安定要因に曝されている為替相場以外は一応の基準に達しているものの、私ど

もが戦後長期にわたり、閉鎖的な社会体質の中で、相互の依存と扶助と順応を主調として破綻を回避しつつ、結果として、経済の国際的な状況に対応できない硬直した欠陥を露呈しつつあることは、周知のとおりである。次に、基本的条件については、人的資質のうち管理能力と技術的能力において相応の資質が認められるものの、他は平均前後の水準にとどまっているし、物的資質にいたっては、殆ど見るべきものがないというのが実情であり、この状況は、教育の現状と併せ考察するときは、将来にわたって殆ど改善の可能性が期待できないということであろう。したがって、わが国の景況の将来性は、さきの経過的な媒介的な素因はもちろん、基本的条件について、改善のための抜本的な工夫と努力が加えられない限り、相当に厳しい見通しを避けることはできないものといわなければならない。

さらに、世界はすでに日一日と国際化の度を進めつつある。そして、経済は、政治や社会の諸問題より一步先んじて、国際的一体化の歩みを進めるであろう。そこではすでに、国家的な民族的な特性への配慮を控えながら、競争とか営利といった古典的観念に近代的で合理的な管理と制約を課するための一段と国際的な

施策が加えられつつある。したがって、もはや今後の国際経済の世界においては、抜駆け的な手法とか、閉鎖的で独占的な手法とか、人間性を無視した手法などは、徐々に影をひそめ、活用のを失って行くであろう。そして、人間社会における経済活動自体の本来的存在意義の自覚に立脚したより根本的で合理的な手法の創案とその実施に向けて、たゆまない模索が重ねられて行くであろう。わが国の国情の特性に応じた本格的経済施策のあり方も、結局において、その枠組みの中において工夫され運営されて行かざるをえないこととなるであろう。

ここで、あえて一言を以て要約を試みるならば、次のようになるであろう。現在の国際経済は、地域的にも非常な格差を生じており、また、内容や発展の過程においても著しい異同がある。まず、このような格差や異同を是正して地域的な均衡を実現するように努力をし、次いで、その成果が安定した持続的な成長を確保できるように運営して行くことによって、国際経済が初めて国際社会に眞の福祉を齎すものとなるであろう。そのためには、国家とか民族といった地域の特性と過去の枠組みを超えた国際的な拡がりの中で、さきに述べた各地域の経過的な

媒介的な素因の不均衡が適切に調整され、さらに地域ごとの人的物的資質の格差や異同が地域の特性を超えて克服されて行かなければならない。

このような課題をロータリーの世界で取り上げると、どのような対応となるであろうか。その結論は、職業上のサービス Vocational Service の国際化であろう。本来、職業上の「サービスの理念」は、一定の地域社会の画定を前提として発想されたものであろうが、現今経済社会の国際化の完結を目前に控え、その国際社会における適用は、単に適用の場を地域社会から国際社会に拡大するというだけの量的拡大にとどまらず、地域社会におけるサービス Community Service と国際社会におけるサービス International Service の各理念を併せ一体化して、国際経済の地域的均衡とその安定成長を実現することの必要性の認識とその推進をはかることよつてのみ、その効用を全うすることができるというべきである。言葉を換えるならば、私どもは、「サービスの理念」The Ideal of Service の経済的側面を強調することよつて、人類社会一般の中に占めるべき正しい姿で、経済を私どもの手元に取り戻す努力を払うべきであるということであろう。

このように、ロータリーはすでに創設以来一貫して「サービスの理念」The Ideal of Service を提唱し、職業上の「サービスの理念」を原点として、地域社会へのサービス Community Service と国際社会へのサービス International Service を併せ強調することによって、国際社会における職業の持つ社会的意義と人間社会における経済活動のあり方について、基本的な理念を提供して来ている。かくて、私どもは、ロータリーが提唱する「サービスの理念」The Ideal of Serviceこそが、経済を含めた国際社会の今後を支える基本精神であること、身近な当面の問題であるわが国目下の不況の根本的解決も、職業上のサービス Vocational Service を中核とする「サービスの理念」The Ideal of Service と無縁でないか、その手厚い精神的環境の中においてははかられなければ、真の解決とはならないことに想到するのである。

(一九九四年一月)

1993-94

Robert R. Barth (Switzerland)

Believe in What You Do—

Do What You Believe in.

1994-95

Bill Huntley (U.K.)

Be a Friend.

1995-96

Herbert G. Brown (U. S. A.)

Act with Integrity,

Serve with Love,

Work for Peace.

1993-94年度

ロバート R. バース (スイス)

行動に信念をー

信念は行動に。

1994-95年度

ビル ハントレー (英国)

友達になろう。

1995-96年度

ハーバート G. ブラウン (米国)

真心の行動、

慈愛の奉仕、

平和に挺身を。

1989-90

Hugh M. Archer (U. S. A.)

ENJOY ROTARY !

1990-91

Paulo V. C. Costa (Brazil)

HONOR ROTARY

- With Faith and Enthusiasm.

1991-92

Rajendra K. Saboo (India)

Look Beyond Yourself.

1992-93

Clifford L. Dochterman (U. S. A.)

Real Happiness is Helping Others.

1989-90年度

ヒュー M. アーチャー (米国)

ロータリーを楽しもう！

1990-91年度

パウロ V. C. コスタ (ブラジル)

ロータリーを高めよ

— 思いを尽くし、熱意を尽くし。

1991-92年度

ラジェンドラ K. サブー (インド)

自分を越えた眼を。

1992-93年度

クリフォード L. ダクターマン (米国)

まことの幸福は人助けから。

1985-86

Edward F. Cadman (U. S. A.)

You are the Key.

1986-87

M. A. T. Caparas (Philippines)

Rotary Brings Hope.

1987-88

Charles C. Keller (U. S. A.)

ROTARIANS — United in Service

—Dedicated to Peace.

1988-89

Royce Abbey (Australia)

PUT LIFE INTO ROTARY

—YOUR LIFE.

1985-86年度

エドワード F. カドマン (米国)

あなたが鍵です。

1986-87年度

M. A. T. カパラス (フィリピン)

ロータリーは、希望をもたらす。

1987-88年度

チャールズ C. ケラー (米国)

ロータリアン—奉仕に結束
—平和に献身。

1988-89年度

ロイス・アビー (オーストラリア)

ロータリーに活力を
—あなたの活力を。

1981-82

Stanley E. McCaffrey (U. S. A.)

World Understanding and Peace Through Rotary.

1982-83

Koji Mugasa (Japan)

Mankind is One; Build Bridges of Friendship Throughout
the World.

1983-84

William E. Skelton (U. S. A.)

Share Rotary

—Serve People.

1984-85

Carlos Canseco (Mexico)

Discover a New World of Service.

1981-82年度

スタンレー E. マッキヤフリー (米国)

ロータリーを通じて、世界理解と平和を。

1982-83年度

向笠 広次 (日本)

人類はひとつ、世界中に友情の橋を。

1983-84年度

ウィリアム E. スケルトン (米国)

みんなにロータリーを
—みんなに奉仕を。

1984-85年度

カルロス・カンセコ (メキシコ)

見つけよう、奉仕の新生面。

1977-78

W. Jack Davis (Bermuda)

Serve to Unite Mankind.

1978-79

Clem Renouf (Australia)

Reach Out.

1979-80

James L. Bomar, Jr. (U. S. A.)

Let Service Light the Way.

1980-81

Rolf J. Klarich (Finland)

Take Time to Serve.

1977-78年度

W. ジャック・デービス (バミューダ)

全人類を結びつけるために奉仕せよ。

1978-79年度

クレム・レヌフ (オーストラリア)

手をさし伸べよう。

1979-80年度

ジェームス L. ボーマー, Jr. (米国)

奉仕の灯で、道を照らそう。

1980-81年度

ロルフ J. クラリッヒ (フィンランド)

時間を捧げよう、奉仕のために。

1973-74

William C. Carter (U.K.)

A Time for Action.

1974-75

William R. Robbins (U. S. A.)

Renew the Spirit of Rotary.

1975-76

Ernest Imbassahy de Mello (Brazil)

To Dignify the Human Being.

1976-77

Robert A. Manchester II (U. S. A.)

"Service ", I Believe in Rotary.

1973-74年度

ウィリアム C. カーター (英国)

今こそ行動のとき。

1974-75年度

ウィリアム R. ロビンス (米国)

ロータリーの精神を振るい起こせ。

1975-76年度

エルネスト・インバッサイ・デ・メロ (ブラジル)

人間に威信を！

1976-77年度

ロバート A. マンチェスター II (米国)

“奉仕”、ロータリーを私は信奉する。

1969-70

James F. Conway (U. S. A.)

Review and Renew.

1970-71

William E. Walk Jr. (U. S. A.)

Bridge the Gaps.

between people
between nations
between man and his environment

1971-72

Ernst G. Breitholtz (Sweden)

Good will begins with you.

1972-73

Roy D. Hickman (U. S. A.)

Let's take a new look-and act.

1969-70年度

ジェームス F. コンウェイ (米国)

再検討し、刷新しよう。

1970-71年度

ウイリアム E. ウォーク Jr. (米国)

隔たりを取り除こう！

人と人の間の

諸国間の

人とその生活環境の

1971-72年度

アンスト G. ブライトホルツ (スウェーデン)

善意は、先ずあなたから。

1972-73年度

ロイ D. ヒックマン (米国)

もう一度、見直そう！

1967-68

Luther H. Hodges (U. S. A.)

Make Your Rotary Membership Effective.

1. Get personally involved in Rotary.
2. Exercise leadership by being successful in your own business or profession.
3. Be loyal to your own community and nation and serve them wherever possible.
4. Keep informed and develop an understanding of the problems of peoples of other nations.

1968-69

Kiyoshi Tougasaki (Japan)

Participate !

- Participate...in your club.
- Participate...through your work.
- Participate...in building your community.
- Participate...through international contacts.

1967-68年度

ルーサー H. ホッジス (米国)

ロータリアンとして、あなたの資格を効果的に。

- 1 ロータリーの活動に進んで自らを参加せしむること
- 2 あなたの職業に成功を収めることにより指導力を発揮すること
- 3 あなたの地域社会や国家に対し忠誠を捧げ、あらゆる機会に奉仕すること
- 4 他国の人々の問題によく通じ、これが理解を深めること

1968-69年度

東ヶ崎 潔 (日本)

参加し敢行しよう！

参加し敢行すること…貴クラブにおいて。

参加し敢行すること…職業を通じて。

参加し敢行すること…地域社会づくりに。

参加し敢行すること…国際的接触を通じて。

1966-67

Richard L. Evans (U. S. A.)

Better World Through Rotary.

1. Share Rotary by adding new members.
2. Share Rotary by adding new clubs.
3. Enjoy Rotary fellowship.
4. Discover and serve the needs of your community.
5. Make your business or profession better.
6. Serve youth.
7. Pursue effective public relations.
8. Emphasize the internationality of Rotary.
9. Engage in World Community Service.
10. Contribute to the Rotary Foundation.

1966-67年度

リチャード L. エバンス (米国)

ロータリーで、よりよい世界を。

- 1 新会員をふやすことによって、ロータリーを分かち合うこと
- 2 新クラブを結成することによってロータリーを分かち合うこと
- 3 ロータリーの友好を享受すること
- 4 貴地域社会が要求している事を見出し奉仕すること
- 5 貴下の事業乃至専門的職業をより良くすること
- 6 青少年へ奉仕すること
- 7 効果的広報を推進すること
- 8 ロータリーの国際性を強調すること
- 9 世界社会奉仕に参加すること
- 10 ロータリー財団を支援すること

1963-64

Carl P. Miller (U. S. A.)

Meeting Rotary's Challenge in the Space Age.

Person to Person.

Club to Club.

District to District.

1964-65

Charles W. Pettengill (U. S. A.)

(Let Us) Live Rotary.

— by sharing Rotary.

— in every business relationship.

— through your community leadership.

— through our world fellowship.

1965-66

C. P. H. Teenstra (Netherlands)

Action, Consolidation and Continuity.

1963-64年度

カール P. ミラー (米国)

宇宙時代におけるロータリーの進路。

個人対個人。

クラブ対クラブ。

地区対地区。

1964-65年度

チャールズ W. ペッテンギル (米国)

ロータリーに生きよう。

—ロータリーを分かち合うことにより

—あらゆる職業関係において

—貴地域社会の指導的任務を通じて

—世界的友好を通じて

1965-66年度

C. P. H. ティーンストラ (オランダ)

行動、強化、継続性。

1960-61

J. Edd McLaughlin (U. S. A.)

You are Rotary

—Live It !

—Express It !

—Expand It !

1961-62

Joseph A. Abey (U. S. A.)

Act.

Aim for Action.

Communicate for Understanding.

Test for Leadership.

1962-63

Nitish C. Laharry (India)

Kindle the Spark Within.

Discover Yourself.

Develop Your Power.

Demonstrate Your Purpose.

1960-61年度

J. エド マックロウリン (米国)

あなたはロータリーです。

—それに生きなさい。

—それを表現して下さい。

—それを膨張させましょう。

1961-62年度

ジョセフ A. エービー (米国)

行動せよ。

行動に務めよ。

理解に途を求めよ。

指導力を高めよ。

1962-63年度

ニッテイシ C. ラハリー (インド)

内部に火を燃やせ。

自身を発見せよ。

力を伸ばせ。

目的を表示せよ。

1957-58

Charles G. Tennent (U. S. A.)

Enlist – Extend – Explore – Serve

1958-59

Clifford. A. Randall (U. S. A.)

Help Shape the Future.

— Dare to Face the Present.

— Share the Object of Rotary.

— Find Your Personal Path to Peace.

— Strengthen Our Heritage.

1959-60

Harold T. Thomas (New Zealand)

Vitalize ! Personalize !

Build Bridges of Friendship !

1957-58年度

チャールズ G. テンネント (米国)

動員—拡張—探究—奉仕

1958-59年度

クリフォード A. ランダル (米国)

未来の形成に助力しよう。

(将来の形成に力をかせ。)

現在に直面するに大胆であれ。

ロータリーの綱領を分けあえ。

平和に貴下の個人的進路を見出せ。

我等の世襲財産を強化せよ。

1959-60年度

ハロルド T. トーマス (ニュージーランド)

生気を与えよ！身につけよ！

友愛の橋をかけよ！

1955-56

A. Z. Baker (U. S. A.)

Develop Our Resources.

1. By Making More Rotarians.
2. By Putting Rotary to Work Where We Work.
3. By Living Rotary in Our Communities.
4. By Cultivating Understanding.
5. By Insuring the Future.
(Put Your Hands to the Plow.)

1956-57

Gian Paolo Lang (Italy)

3 Targets

1. Keep Rotary Simple.
2. More Rotary in Rotarians.
3. Learn More About Each Other.

1955-56年度

A. Z. ベーカー (米国)

われわれの資源を開発しよう。

- 1 ロータリアンを殖やし育てることによって
- 2 職場にロータリーを活かすことによって
- 3 社会にロータリーを実践することによって
- 4 国際的な理解を深めることによって
- 5 将来にそなえ青少年を導くことによって
(諸君の手を犁に。)

1956-57年度

ジャン・パオロ・ラング (イタリア)

3つの目標

- 1 ロータリーは、簡潔に。
- 2 ロータリアンは、もっとロータリーを。
- 3 お互いにもっと知り合おう。

1954-55

Herbert J. Taylor (U. S. A.)

6 Objectives for 1954-55

1. Glean from the past and act.
 2. Share with others.
 3. Build with Rotary's 4-Way Test.
 4. Serving youth.
 5. International good will.
 6. Good Rotarians are good citizens.
-
1. Review our past and constructively prepare for the future.
 2. Seek to increase our membership so that Rotary may be shared by many as possible.
 3. Strive to apply the Four-Way Test in personal lives.
 4. Try to set salutary examples to juniors and minors.
 5. Endeavor to promote international friendship on all occasions.
 6. Take pains to be good and loyal citizens.

1954-55年度

ハーバート J. テイラー (米国)

六つの目標

- 1 過去に学んで行動せよ。
- 2 他人と分かち合え。
- 3 四つのテストで身を固めよ。
- 4 青少年に対する奉仕。
- 5 国際親善。
- 6 良きロータリアンは、良き市民である。

- 1 過去の研究を将来に生かせ。
- 2 ロータリーを他に分け与えよ。
- 3 四つのテストを強調せよ。
- 4 ロータリアンが青少年の模範に。
- 5 国際間の理解と親善に前進せよ。
- 6 善きロータリアンは即ちよき市民である。

1950-51

Arthur Lagueux (Canada)

Goals for 1950-51

1. In club service we must beget our heirs.
2. In vocational service honesty is still the best policy.
3. In community service we can plan for the future.
4. In international service we must re-examine our world.
5. And finally we can extend the influence of Rotary.

1952-53

H. J. Brunnier (U. S. A.)

Rotary Thinking, Rotary Act.

1953-54

Joaquin Serratosa Cibils (Uruguay)

Rotary is Hope in Action.

[The more clubs we have, the more friends we have, and more friends, the greater our opportunities for service.

1950-51年度

アーサー・レグー（カナダ）

1950-51年度の目標

- 1 クラブ奉仕では、後継者の育成
- 2 職業奉仕では、正直が最善の方針
- 3 社会奉仕では、将来の計画
- 4 国際奉仕では、世界の再検討
- 5 ロータリーの影響の拡大

1952-53年度

H. J. プルニエー（米国）

ロータリーの思想、ロータリーの行動

1953-54年度

ホアキン・セラトサ・シビルス（ウルグアイ）

ロータリーは行動の希望である。

- ┌ クラブがふえれば、友人が増す。
- └ 友人が増えれば、奉仕の機会が増す。

1949-50

Percy C. Hodgson (U. S. A.)

Objectives of Our Team for 1949-50

1. Each new member admitted into a Rotary Club to be adequately informed about his duties and obligations BEFORE his induction properly introduced to the club and effectively assimilated into the work of the club during the first year.
2. A better understanding and application of the principles of Vocational Service as set forth in SERVICE IS MY BUSINESS.
3. A contribution to world understanding and peace through an intensification of our international service program.
4. An outstanding district conference in every district.

1949-50年度

パーシー C. ホジソン (米国)

1949-50年度の目標

- 1 新会員の啓蒙

- 2 「奉仕こそ我がつとめ」の実践

- 3 国際奉仕による国際理解と平和の達成

- 4 すばらしい地区大会の開催

この年度に、初めてRI会長の目標が示された。

ただ、1953～54年度までは、公式に訳文されていない。

付 各年度のRIのテーマ

Rotary International Themes(Official Directory 所属)の記載を基準とし「ロータリーの友」、「ロータリー・ダイアリー」、「ロータリー日本50年史付録歴代RI会長ターゲット集」の記載など参考として、相違箇所を括弧で表示した。

〈著者略歴〉

菅生 浩三 (すごう こうぞう)

1926年10月生

1952年3月 東京大学法学部卒業

1954年4月～56年3月 神戸地方裁判所、同家庭裁判所裁判官

1956年4月～ 弁護士として弁護士会の役職ならびに数多くの企業と公私の団体の法律顧問を務める

1969年2月 大阪北ロータリー・クラブ入会

1987年～1988年 同クラブ会長

1991年～1992年 国際ロータリー第2660地区（大阪府大和川以北）地区ガバナー

現在 菅生綜合法律事務所主宰

朝日カルチャーセンター講師

著書に「ロータリー随想～その周辺とともに～」 「建設工事判例提要く上・下」 「請負契約の基本問題」 「不動産判例集成く1～5」 巻」 他がある。

続・ロータリー随想—その周辺とともに—

1996年4月25日発行 定価1,200円

著者 菅生 浩三

発行人 浅田 厚志

発行所 株式会社出版文化社

〒540 大阪市中央区森ノ宮中央1丁目14-2
鶴森之宮ビル8F

TEL 06-941-1321(代) FAX 06-941-0602

〒111 東京都台東区柳橋1丁目3-5
今文ビル6F

TEL 03-5821-5300(代) FAX 03-5820-9543

協力 朝日カルチャーセンター

印刷・製本 大阪書籍株式会社

©Kozo Sugo 1996 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに表記しております。

ISBN4-88338-116-1 C0036

ロータリー随想 その周辺とともに

個人と社会とをロータリーのサービスの理念で結ぶ

ロータリアンが綴る小編集

四六判／216頁 定価1,500円(本体1,456円)

発行・出版文化社

☆ご注文について ご注文は、なるべくお近くの書店をご利用ください。
直接小社にご注文・お問い合わせいただく際は、下記へお願いいたします。

*注文電話：東京・柳橋 0120-555583／大阪・森ノ宮 0120-213874

続・ロータリー随想 - その周辺とともに -
菅生浩三

1996年4月 初版 発行

電子文庫発行 2008年 11月